言語（ロゴス）と場所（トポス）
――シニフィアン連鎖・バベルの図書館・オイラー図[1)]――

原　　和　之

> あるとき崔奔はこういったに相違ない、隠退して本を書こうと。またあるとき、隠退して迷路を作ろうと。すべての人間が、それは二つの仕事だと思った。本と迷路とはひとつだと考えた者は一人もいなかった。
>
> J. L. ボルヘス「八岐の園」

1.　場所（トポス）としての言語（ロゴス）:「シニフィアン連鎖」

ジャック・ラカンが精神分析の分野で行った仕事については、これを二十世紀に広く見られる、言語学を準拠科学として展開した人文科学の革新、いわゆる「言語論的転回」の文脈の中で位置づけることがしばしばなされてきた。精神分析実践の中心にありながら、フロイト以降の分析理論の展開で必ずしも正面から理論化されてこなかった言語の問題を、当時最先端の言語学の知見を応用しつつ考え直す。これが少なくとも 50 年代のラカンの仕事の基本的なスタンスであった、というわけだ。

ただ、こうした位置づけに大きな異論がないとしても、ラカンがそこで実際に何をしようとしていたのかという点は、さらに詳細に見てゆく必要があるように思われる。ラカンが言語を主題化するとき、彼は同時代の分析哲学のように、日常的な言語実践の中に分け入って、それがはらむ「哲学的」問題を精緻に解析するということを目指しているわけでは決してない。機知の事例をとりあげ、また症状の中で現れる言語のさまざまな様態を論ずることがあるとはいえ、だからといって彼の理論的な関心が、具体的な個々の言語現象にあったわけではない。ラカンが「言語」を論ずる際に求めたのは、なによりそれが精神分析的経験を位置づけるための参照軸となることであったのだ。

我々が言語を使う中で、というより言語というかたちで経験しているものは、さまざまなレベルを内包している。そのなかで精神分析の経験を、その特殊性において位置づけるためには、どのように切り込めばよいのか。ここでラカンは、ある意味でとても思い切ったことをする。つまり言語の現象のうち、あるレベルを非常に単純なモデルで定義した上で、それとの関わりで、そしてそこからずれたところに、精神分析に固有の出来事のレベルを設定する、ということをする。しかしこれについて単純化を批判するの

はあたらない。ラカンがこの時期の議論で目指したのは、言語の豊かな現象を包括的に捉えるということであるよりはむしろ、そのなかで精神分析のあり方を、先鋭的な姿で切り出すということであったのである。

さて、ラカンのこの理論的な作業は、我々が通常持っている言語観の大きな転換を含意していた。この転換は、我々の観点からは、相互に関連する次の三つの点に要約できる。

(1) 言語を話すという場面ではなく、聴くという場面から考える。

(2) 言語的な単位をあらかじめ、我々から独立して存在するものと考えるのではなく、聴く主体の参与、すなわち「聴取」があって初めて成立するものと考える。

(3) 我々は言語を「使う」と思っているが、実際は、我々は言語の中に「いる」。言語は我々の「道具」ではなく、むしろ我々の「場所」である。

最初の点についてはまず、「聴く」ということが大きな比重をもつ、精神分析における言語のあり方を反映していると考えることができる。またここからラカンが何故、「聴覚映像」として定義されるソシュールの「シニフィアン」概念[2)]を中心に据えて理論を構築したのかも理解することができるだろう。

「聴く」という場面で現れる言語は、まず一つのリボンのように連続したものとして現れてくるのであり、聴き取られ理解されることで初めてそこに「句切り」が入れられ、言語的な単位――「一つのシニフィアン」――が現れてくる。ソシュールがすでにこの点を指摘しているが[3)]、こうした言語の捉え方は、あらかじめ存在する単位（たとえば語）を考え、これをどう組み合わせるかを考える言語観、その限りで送り手の側から言語を考える文法や論理学が想定する言語観とは、その出発点が大きく異なっているということができる。

さて「聴く」ことを通じて初めて成立するこの単位は、まったく自由に切り出される訳ではなく、一つの条件を持っている。すなわち有意味性の条件である[4)]。しかし発話を構成する音素の連鎖から切り出された任意の切片が意味を持つということは（すなわちその切片が言語の「単位」であることは）どのようにして判断できるのか。確かに、プラクティカルな解決ということで言えば、その切片が言語の有意味な単位のリストたる辞書に載っているかどうかで判断することはできる。ただ、それではそれらの単位は、そもそもどうして意味を持つと認められて登録されたのか。バンヴェニストによれば、言語的な連鎖の切片は、それが複数の文脈の中に見出される限りにおいて、つまりそれが複数の可能な連鎖を従えることができることが確認される限りにおいて、一つの有意味な単位として認められる[5)]。「意味」についてはソシュール以来、「概念」と「外的対象」という二つの定義が知られていたが、このバンヴェニストの議論は、そこに「可能な諸用法（用例）（emplois）の集合」という第三の定義を加えるものだ[6)]。この定義には大きく二つのメリットがある。一つは、「意味」の定義にあたって、言語外的な事象を参照する

必要がなく、意味の完全に言語内的な定義が可能になること。そしてもう一つは、意味の「客観的」な定義ないし検証が可能になることである。つまり、ある切片が意味を持つことを示すためには、その複数の出現箇所を提示するだけで足りるのだ。

確かにこれら二つのメリットは否定できないものの、一見したところこうした意味の定義が有用なのはごく限定的な場合、たとえば失われた言語、誰も使う者がいなくなってコーパスだけが残っている言語を再構成する、といった場合だけではないかと思われるかもしれない。実際バンヴェニストはこの構想を、そもそも言語学の対象となる言語的な事実がどのようによって定義されるか、という原理的な問いに答えようとするなかで導入している。しかしラカンはこの視点を逆転させ、言語をすでに起きた出来事として、学術的な対象として捉えるのではなく、言語を生きる主体の視点から考えることによって、この定義に新たな命を吹き込んだ。すなわち彼は、これこれの切片が連鎖の複数の箇所に見出されることによって言語的な単位であることが確証される、と考えるかわりに、言語的な単位が与えられたとすると、そこには一定の「可能な諸用法（用例）の集合」ないし連鎖の範囲が定まるとしたうえで、この関係が、実際の「聴取」の場面で機能すると考えた。

ここで成立するのは、ある種の方向付けられた予期の地平構造である。一つのシニフィアンが聴き取られたとする。すると、その聴取と同時に、それと接続することが可能なシニフィアン群が素描のかたちで与えられ、可能な聴取の領野を規定する。換言すれば、聴取は絶対的ではあり得ない。シニフィアンの聴取というのは、まったく何もなかったところに「一つのシニフィアン」を出現させるということではない。それはさしあたって選ぶことであり、先行するシニフィアンから定まる可能なシニフィアンの集合から、一つのシニフィアンを聴き―取ることだ。ここでは「聴取」の非常にシンプルなモデルが提示されている。これは「聴取」をいわば二行程のプロセスとして捉えるモデルであり、すなわち非常に高速に交替する、「可能なシニフィアンの集合から一つのシニフィアンを聴き―取る」局面と「一つのシニフィアンの先に可能なシニフィアンの集合が素描される」局面からなるモデルである[7)]。

この単純なモデルと相関して、三番目のポイントが定まってくる。

線条的に展開される発話を聴くということはつまり、この「聴取」のプロセスの反復適用ということによって理解することができる。さて、この反復適用を、可能なあらゆる形で行ったとする。さらに「接続しうるシニフィアンの集合」は各国語ごとに定まるので、そのそれぞれについて行ったものをすべてあわせたものを考える。こうして全てが言われ、聴き取られた、というところから考えるとすると、そこには、「一つのシニフィアン→複数の接続しうるシニフィアン」の単位が繰り返された結果として成立した、巨大な分岐構造を考えることができるはずである（図 1）。

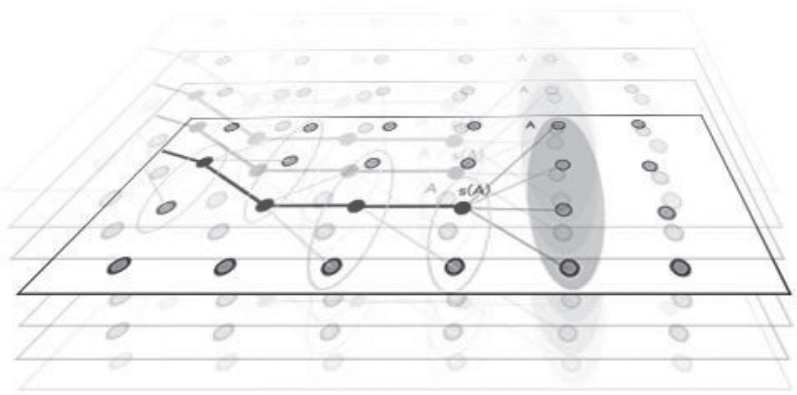

図 1:「シニフィアン連鎖」の模式図[8)]

「聴取」とは、畢竟この分岐構造のなかを進むことに他ならない。ここには有意味な単位、メッセージを担った単位をやりとりする、という、素朴な意味での「手紙」的な言語――メッセージを担った何かのやりとりとしての言語――のありかたとは、まったく異なった言語観が現れる。この構造のなかで、主体は「一つのシニフィアン」に、そのシニフィアンの聴取という行為の主体として内在し、そしてその前に、〈他者〉はその言わんとしていることのありうるシニフィアンの総体として具現化する。換言すれば、この構造、シニフィアン連鎖の構造として、言語は我々が何らかの目的をもって操作する対象、「道具」ではなく、むしろ我々がいる「場所」として現れてくるのである。

「場所」としての言語を語るという試みには、前例がないわけではない。ラカンの確認された参照圏のなかに限っても、たとえばハイデガーがすでに「『ヒューマニズム』に関する書簡」のなかで「言葉という住居のうちに人間は住む」と述べているし[9)]、ラカンが翻訳した『ロゴス』では、言語を「置くこと」と「集めること」の側面から論ずるにあたって、それを農夫が作物を収穫し、その作物を保蔵するために集まる一連の運動になぞらえて理解しようとしていた[10)]。

こうしたハイデガーの議論が、道具としての言語といった発想からラカンが離れるにあたり果たした役割は否定できないものの、その一方で結果として練り上げられた「シニフィアン連鎖」の概念がハイデガー本来の構想との間に示している隔たりは、決して無視することができないように思われる。というのも、ハイデガーにとってその「場所」がなにより存在の出来事の場所であったのに対して、ラカンが「シニフィアン連鎖」によって提示しようとした場所はさしあたり、人間の、あるいはより適切な用語を用いるとすれば主体の行為の場所であったからだ。「場所」の構想にあたって、ラカンがバンヴェニストのアイディアをいわば反転させたものが核になっているということはすでに述べた。しかし、それはいわば言語の営みを、その断面において、微分的な操作におい

て示すものにすぎない。聴取が辿ってきたある特定の軌跡の突端において一つのシニフィアンが聴き取られたとすると、それと相関して、その先に後続することの可能なシニフィアンの一定の集合が定まる（「盗まれた手紙についてセミネール」の「序論」で導入された数学的な装置が提示しようとしたのは、要するにこれである）。つまり、限られた数のシニフィアン（たとえば音素）によって規定される言語的な空間のなかで、どちらに進むことができるか、その方向が一定の幅を持って定まる。この方向は、聴取が進むにつれて刻々と変化してゆくだろう。この変化を手がかりに聴取の経路を復元するという、いわば積分的な手続きの発想はどこに由来するのか。

その起源には、一つの講演があるように思われる。すなわちジョルジュ・テオデュール・ギルボー（Georges Théodule Guilbaud（1912–2008））の「水先案内人、戦略家、ゲームプレーヤー：人間行動の理論のために」[11)]である。ギルボーは、戦後フランスにゲーム理論やオペレーションズ・リサーチ、サイバネティックスなどの理論を紹介し、人文社会科学分野への数学の応用をすすめた数学者で、ラカンとは1950年代の初めから構造についての研究会を行うなどの学術的な交流があったことが知られている。その彼が1953年3月24日におこなった上記講演のなかでは、チェスやチェッカーに言及するE・A・ポーの「モルグ街の殺人」とゲーム理論の黎明期との同時性が強調され[12)]、また「盗まれた手紙」の「丁半遊び」のくだりが「子供のゲームの初歩的な分析」[13)]の事例として言及されている。さらにそこでは「丁半遊び」の分析が決して心理学の問題ではなく、優れて論理の問題であることが、ラカンの「論理的時間」の論文を参照しながら指摘されているなど[14)]、ラカンの思索との交錯をはっきりと跡づけることができる。この講演の、ゲームにおける必勝法の存在をめぐる議論の歴史が取り上げられている部分に、「シニフィアン連鎖」概念の着想、とりわけその場所的な捉え方を促したと思われるくだりが現れてくる。

ギルボーによれば、チェッカーに関する問題を取り扱った最初の学術的な報告が行われたのが1852年で、その少し後に数学者のエドゥアール・ルカ（Edouard Lucas）が、「枝（rameaux）」や「分岐（ramification）」、「迷路（labyrinthe）」といった現代の議論にも通ずる用語を導入した上で、どんな場合にも勝つということが可能かどうかという問いを立てているという（図2）。

その後1912年にこの問題の最初の証明がなされるが、その証明の基本的な考え方をギルボーは次のように要約している。

> ゲームのそれぞれの瞬間において（そしてとりわけゲームの冒頭において）、我々は一定数の仮説、規則によって許された一定数の行為の選択肢を持っている。このとき我々は、少なくとも理念的には、チェスやチェッカーといったゲームを、一種の分岐した樹形図（une sorte d’arbre ramifié）によって表すことができる。この樹形図の

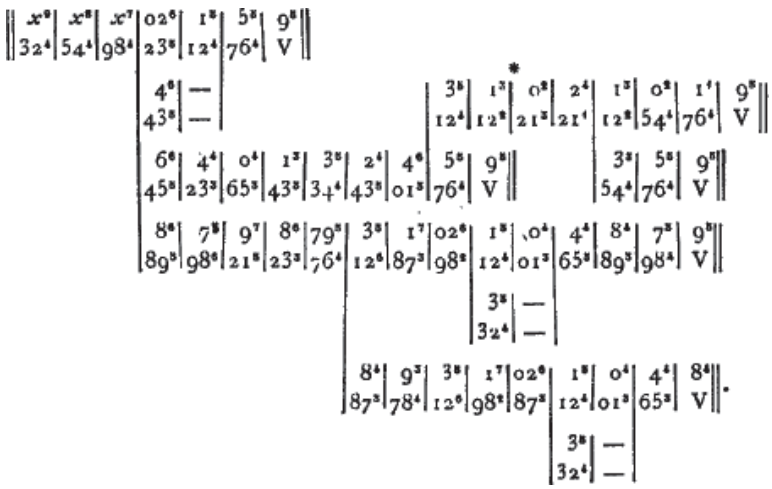

図 2:「枝（rameaux）」の例[15)]

なかで（「手番」の）プレーヤーは、分岐点にくるたびにどの道が選ばれるかを決めなくてはならないのである。迷路に例えていえば、それは（確かに全体図の分からない）迷路のなかを進むことなのだが、ただしそのなかで動かされる動体は、あるときには一方の意志によって動かされ、またあるときにはもう一方の意志によって動かされる。一方がそれを黒の扉から出そうとするのに対して、もう一方は白の扉から出そうとするのだ（引き分けという第三の扉もあるのだが、話を簡単にするためにそれはさしあたり措こう）[16)]。

ゲームにおける主体間の関係と、言語における主体間の関係は、完全に重なり合うわけではない。しかしすぐあとの時期のセミネールで、言語の役割を強調するべく導入された概念である「象徴的なもの」の事例としてゲームを参照するラカンは、すくなくともそれらの共通する部分を見ようとしていたということはできるだろう。そして両者に共通する部分とは、単に一定のルールの共有という点だけではない。それに加えて、そのルールが主体の――チェスにおいては指し手の、言語においては「聴取」の――行動の一定の選択肢を規定し、さらにその選択肢が「少なくとも理念的に」展開されたときに、主体がそのなかに位置し、移動するような一つの空間が考えられるということ。ギルボーの講演がもたらしたのは、場所としての言語を構想するにあたって鍵となる、この発想であると考えることができる。

さてギルボーは、そうした空間を具現化する「迷路」の例として「アルゼンチンの詩人」J. L. ボルヘスの「八岐の園」に言及していた[17)]。この作品についてギルボーは 1951 年にガリマール社から公刊された仏訳『伝奇集（*Fictions*）』を参照させているが[18)]、ここ

では同書に収められている「バベルの図書館」を見ておこう。直接に確認できるラカンの参照圏からは離れるものの、この作品は同時代に「シニフィアン連鎖」とはまた異なった仕方で「場所」としての言語という構想を提示している。そしてこれとの対比において、我々はラカンの構想の独自性をより一層際だたせることができるだろう。

2. 探索の閉域:「バベルの図書館」

よく知られているとおり、1941 年に発表されたこの掌篇もまた宇宙をすぐれて言語の場所として、すなわち図書館として描き出そうとする。「(他の者たちは図書館と呼んでいるが) 宇宙は、真ん中に大きな換気孔があり、きわめて低い手すりで囲まれた、不定数の、おそらく無限数の六角形の回廊で成り立っている」[19]。それは、一行約 80 字、各ページ 40 行、一冊 410 ページからなる無数の書物を収める図書館である。「無数の」というのは、それぞれの本の中に書かれてあるのが、アルファベットの 25 字、ピリオド、コンマそしてブランクの順列組み合わせによる文字列であり、そのヴァリエーションは膨大な数にのぼるからだ。作品中で言及されている「ある天才的な司書」の指摘によれば、「広大な図書館に、おなじ本は二冊ない。彼はこの反論の余地のない前提から、図書館は全体的なもので、その書棚は二十数個の記号のあらゆる可能な組み合わせ――その数はきわめて厖大であるが無限ではない――を、換言すれば、あらゆる言語で表現可能なもののいっさいをふくんでいると推論した」[20]。

この「バベルの図書館」と「シニフィアン連鎖」の比較は、いくつかの重要な示唆を与えてくれる。

両者に共通するのはまず、言語活動を完了の相のもとで捉えるという構想である。また「全てが書かれ、言われたとする」というところから出発して、読まれうるものの、聴かれうるものの総体が考えられる点も共通している。そしてこれと相関して、書くことと読むこと、言うことと聴くことの間に漠然と信じられていた質的な差異も、はるかに小さなものとして現れてくる。書くこととは、記号の組み合わせを新たに産出するということではもはやなく、「バベルの図書館」のなかの一冊の本を指し示すことに等しいし、言うこととは、言葉を紡ぐことではなく、「シニフィアン連鎖」のなかのこれこれの軌跡を指定するということに帰着する。それぞれのなかで、発話行為に認められてきた創造的・能動的な側面は最小限に切り詰められる。ここで書くこと・言うことは、ある特定の仕方で読むこと・聴くことに他ならないというわけだ。

こうしてこれら二つの構想は、いずれも言語行為をめぐる見方の大きな転回を促しているわけだが、それではこれらを同じものと考えてよいのか。一つ大きな違いであるように思われるのは、それぞれの広がりである。「バベルの図書館」では、有限の寿命を持つ者のスケールからいえば実質的に無限であるとはいえ、本の可能な数には限りがある

が、「シニフィアン連鎖」にはそうした形での限界はない[21)]。これは前者においては本のフォーマットが定まっているためであり、411ページの、409ページの、あるいは無限に続く書物がありうると考えるならば――そもそも410ページの書物しか存在しない、というのは原理的に確認不可能な、「推論」に過ぎなかった――そうした制約はなくなる。この点からいえば、「シニフィアン連鎖」のほうが「バベルの図書館」よりも広い広がりを規定しているように見えるかもしれない。しかし他方で、「バベルの図書館」の書物のなかには、一見無意味な――たとえば410ページ繰り返し現れる「MCV」といった――文字列を含むものがあるが、各国語のなかで「シニフィアン」と「可能な諸用法の集合」を単位に構想された「シニフィアン連鎖」には、こうしたものが入る余地はないように見える。その意味では、「バベルの図書館」のほうが「シニフィアン連鎖」よりも広い範囲をカバーしているといえはしないか。

この最後の問題において、「シニフィアン連鎖」を制約しているように見えるのは、有意味性の条件である。しかし意味するということは、記号に内在する性質ではない。ボルヘスの作品が示唆しているように、ただちに有意味とは判じがたい「MCV」の410ページにわたる繰り返しですら、それを「暗号法」と考えることで、意味あるものとして取り扱うことは十分可能なのだ。先取りして言えば、ラカンはこの問題を、隠喩的な創造や、機知、あるいは言い間違いの効果という形で主題化し、それが「シニフィアン連鎖」への内在とは異なった主体の構えを、ポジションを要求するものであることを指摘した上で、それが精神分析的経験を規定するものだと主張することになる。ただ、ここでは有意味性の条件が、決して「シニフィアン連鎖」を閉じてしまうものではなく、未知の言語ないしコードの可能性を認めることで、最終的には記号のあらゆる順列組み合わせにまで開いてゆくポテンシャルを持つものであることを確認しておけば十分だろう。

しかしなにより「バベルの図書館」は、すぐれて探索の、遍歴の、さらには彷徨の空間として描き出されていることによって、場所としての言語における主体の有り様を考える手がかりを与えてくれる。「バベルの図書館」のなかの人間は、決して自足して自分のいるところにとどまる人間ではなく、生地を離れて旅をする人間である（「図書館のすべての人間と同じように、わたしも若いころよく旅行をした。一冊の本を求めて、おそらくはカタログ類のカタログを求めて遍歴をした」）。その遍歴は何より、読まれうる全てが書かれて収められているというこの図書館の存在によって動機づけられている。「図書館があらゆる本を所蔵していることが公表されたときに最初に生まれた感情は、途方もない歓びであった。全ての人間が手つかずの秘密の宝の持ち主になったような気がした。その有効な解決が六角形の一つに存在しないような、個人的あるいは世界的な問題はなくなった。宇宙は根拠が与えられ、宇宙は突然、希望の無限の広がりを獲得した」[22)]。ひとびとはそこに自分自身のことが書かれた本を見出そうとして狂奔する。「そのころ、

『弁明の書』というものが大いに話題となった。弁明と予言の書物がそれで、宇宙の人間の一人ひとりの行為を永久に弁護し、その未来のために驚くべき秘密を蔵しているものであった。何千という貪欲な人間が懐かしい生地の六角形を去り、おのれの「弁明」を見出すという空しい意図に狩り立てられて、階段を駆けあがった。これらの巡礼たちは狭い回廊で争い、どすぐろい呪詛のことばを吐き、神聖な階段でたがいの首を絞め、いかさまな本を穴の底に投げ込み、遠い地方の人間たちに放り出されて死んだ。他の連中は発狂した」[23]。しかし図書館に収められた書物の数を考えるなら、その本が見出される可能性は無に等しい。そのためやがて次のような事態が訪れることは避けがたいことであった。「当然のことだが、途方もない希望のあとに度の過ぎた落胆が訪れた。ある六角形のある書棚に貴重な本がおさめられていながら、それらに近づくことができないという確実性が、ほとんど耐え難いものに思えたのだ」[24]。

「バベルの図書館」と同様「シニフィアン連鎖」においても言語は主体にとってすぐれて探索の場所として現れてくる。前者においてひとは「弁明の書」を、あるいは「他の全ての本の鍵であり完全な要約である一冊の本」を求めて彷徨ったわけだが、後者において求められているのは他者の言わんとすることである。他者が何を言わんとするのかを知るということは、言語的な水準における他者の欲望の対象を知るということに等しいが、そもそも主体が問題をそうした形で定式化し、シニフィアン連鎖の構造へと入り込んでゆく過程としてエディプスコンプレックスを再定式化したものが、ラカンのいわゆる「欲望の弁証法」であった。そしてボルヘスがここで描き出している「途方もない歓び」から「度の過ぎた落胆」へというプロセスは、ラカンがその入口たる前エディプス期に想定していた弁証法のダイナミズムと重なり合う。原初的な「寄る辺なさ」からの救いをもたらすはずの〈母〉の現前と不在になすすべもなく翻弄されていた主体にとって、ある種の投影的同一化の結果として想定される〈母〉の欲望は、徹底的な受け身の状況から抜け出る、喜ばしい可能性を開くものである。というのも〈母〉がもし何かを――想像的ファルスを――欲望するならば、その欲望の対象を介して〈母〉を引き留めることも可能になるからだ。しかし繰り返される試行錯誤にも関わらずそれが知り得ないことによって、〈母〉の欲望はやがて、主体がどんな欲望を想定したとしてもそれを飲み込んでしまうような無限の欲望、乗り越えがたい欲望、その限りにおいて恐るべき欲望として現れてくる[25]。これと相関して主体はクラインのいわゆる「抑鬱ポジション」に置かれることになるわけだが、ボルヘスの文学的構想力はこうした帰結をも過つことなく捉えている（「いっさいがすでに書かれているという確信は、われわれを無に、あるいは幻に化してしまう。[…] おそらく、老齢と不安で判断が狂っているかもしれないが、しかしわたしは、人類――唯一無二の人類――は絶滅寸前の状態にあり、図書館――明るい、孤独な、無限の、まったく不動の、貴重な本にあふれた、無用の、不壊の、そして秘密の図書館――だけが永久に残るのだと思う」（*op.cit.*, p. 115））。

「度の過ぎた落胆」にせよ「抑鬱ポジション」にせよ、主体がここで直面する無力は、探索の内包する不可能性と相関している。「バベルの図書館」のなかを流離う主体にとって、求める書物はいわば確率論的な無限遠に置かれており、あっても不思議ではないが見つかるまではあるかどうか分からないという性質のものである。他方「シニフィアン連鎖」の分岐を進み行く主体は、それが聴取の主体である限りにおいてつねに「可能な諸用法の集合」が眼前に素描されるのを見ることになるために、聴き取ったシニフィアンが他者の最後の言葉であるかどうかについて確信することがかなわない。こうしていずれにおいても主体は探索を際限なく続けることを余儀なくされる。別の言い方をするなら、これらの探索の主体は、その仕方こそ異なるものの、本質的に不安な主体であり、場所は彼らにとって永遠によそよそしいままにとどまる。求める書物を手に入れ、いかなる曖昧さもない形で他者の言わん（シニフィアン）とすることが聴き取られるということがあり得ない以上、その主体は本来あるべき場所にない主体でありつづけ、つねに他の回廊へ、他の分岐へと回付されている。逆説的な言い方をあえてすれば、この主体は、その本来の場所にないという形でこの場所のなかにいるのである。しかしこの、場所に対する主体のある種の外部性は、この場所が持つかもしれない境界のほうから理解されるべきではない。そもそもそうした意味での外部性は、「バベルの図書館」においては、可能な本の数の有限性にもかかわらず注意深く遠ざけられていたし[26]、「シニフィアン連鎖」は、前方に向けても後方に向けても無際限である――いかなる「一つのシニフィアン」の聴取も、その先に続くことの可能な諸シニフィアンの集合を予描し、またその聴取が行われることになった可能な諸シニフィアンの集合を予描する「一つのシニフィアン」の聴取を前提としている――ということによって、そうした境界を持つ可能性をあらかじめ排除されていた。ここで我々は、一つの理論的な困難に行き当たっている。すなわち、主体の一定の存立様態を記述するにあたって「場所」という形象に訴えることが避けられない一方で、そこで問題となる外部性は、通常の空間的な直観を安易に持ち込むことによっては決して正確には分節化され得ない、という困難である。どうすればこの、空間的には把握され得ない外部を厳密に記述することが可能になるのか。

ここで重要なのはまず、探究する主体が生きている「よそよそしさ」の水準に定位することである。それは言語的な場所に対する主体の外部性の原初的現象形態なのであって、この現象形態を明らかにすることによって初めて、精神分析的経験を規定する外部性の経験が、この「よそよそしさ」のある種の変容として理解できることが明らかになるだろう。

主体はどのようにして言語の「内」にあるのか。シニフィアン連鎖の概念に即して言うとすれば、主体は可能なシニフィアンの集合の中から「一つのシニフィアン」を聴き取った行為の主体として、そのシニフィアンの下にある。しかし主体がその場所に留まることができないとすれば、それはその聴取が「意味」を参照してしか行われ得ず、

ということはつまり他者がそれに続いて言わんとしていることのありうるシニフィアンの集合が、その都度「素描の形で」主体に対して形成されるということによる。ここで我々はいったん「バベルの図書館」との類比から離れなくてはならない。というのも主体が次々と手に取るそれぞれの書物の間には、シニフィアンの場合に認められるような連鎖の関係は存在しないからだ。

しかしその一方で、ボルヘスの虚構は我々に主体と言語の関係に関する別の洞察を与えてくれる。バベルの図書館で一つの書物とその周囲にある書物の間には、予測可能性といった形で限定されるつながりはないものの、一つの書物を手に取った主体が次に手にとることのできる書物の範囲は、たとえば空間的な近接性を原理として規定されていると考えることができる。その限りで、一つの項を選択した主体の前に、可能な一連の選択肢が提示されるという構図自体はシニフィアン連鎖の場合と大きく変わらないとも言えるだろう。このとき探索の主体は、手に取った書物を元に戻して、さらに周囲にある書物のうちから一冊を取り上げる。図書館という設定の中ではいかにも自然に思われる設定だが、シニフィアン連鎖との類比をあらためて推し進めようとするとき、我々はそこに還元不能な差異があることに気づく。というのも書物がそれを手に取る動作と独立して存在する一方で、シニフィアンは聴取の行為と無関係にその存在を考えることができないからである。「可能な諸用法（用例）の集合」すなわち接続しうるシニフィアンの集合を我々は、書かれた文字の集まりのように思い描くことは確かにできよう。しかしそこから一つを選ぶというとき、選ばれているのは物質的な何かであるというより、むしろ聴取の行為である。つまりしかじかの音が選ばれているのではなく、私と同じようにこう聴き取りもし、ああ聴き取りもするであろう、他者の聴取の複数の可能性のうちの一つが選ばれている。さてこのとき、主体は聴き取られた「一つのシニフィアン」に内在するというのとは異なったポジションに位置していることがわかるだろう。「可能な諸用法（用例）の集合」に対峙する主体は、「一つのシニフィアン」を支える聴取の行為を我が身に引き受けるかわりに、これに外側から向き合う位置を占めている。我々が聴取に区別した二局面には、異なった主体のポジションが対応しているのである。

3.　言語にとって「外」とは何か

言語に対して主体がとりうるポジションは、一つしかないわけではない。そしてシニフィアン連鎖は、その複数のポジションを分節化することを可能にする装置として機能している。上ではさしあたり聴取の内部に区別できる二つのポジション――内在と俯瞰――が区別されることを見たわけだが、それではこれら以外にはどのようなポジションがありうるだろうか。

主体は聴取の行為を通して、聴き取られた「一つのシニフィアン」に内在する。これ

が、主体が言語の中にあるあり方の、最も基本的な形である。しかしこの内在に先だって、主体は複数の可能な聴取に外側から向き合うポジションを占めていたのでなくてはならない。内在は、そうした俯瞰のポジションから見通せるそれらの可能性のうちの一つを選び取り、引き受けるという形ではじめて実現する。そしてこの、未だ主体の聴取ではない聴取、主体から独立して遂行される聴取を、いわば模造するものとして文字はある。その意味で「バベルの図書館」は、言語の場所のうち、シニフィアンへの内在から一つ「外に」踏み出した主体のポジションを具現化する装置となっている。ただ、「図書館」として理解された言語からの主体の脱出（エクゾダス）はそこで止む。なぜなら主体がどこまで進んだとしても、そこにあるのは例の六角形の部屋であり、本に囲まれた空間から外に出ることはかなわないからだ[27]。そして、本が、文字が、要するに言語が主体から離れて、絶対的に存在する、という前提――ボルヘスが掲げた図書館の第一の公理は「図書館は永遠（アブ・アエテルノ）を超えて存在する」（*ibid.*, p. 105.）であった――に立つ限り乗り越えがたいこの限界の外に、主体がとりうるもう一つのポジションがありうることを、「シニフィアン連鎖」の概念は予告している。

既に見たとおり、すぐれてラカン的なこの概念には、言語的単位＝シニフィアンを、主体とは無関係に絶対的に存在する原子的な存在ではなく、あくまで「聴取」の行為に呼応して現れてくるものと見なす考え方が含意されていた。これは単に「一つのシニフィアン」が、発話という「一本の継ぎ目のないリボン」から主体によって切り出されることによって初めてそのものとして現れるからというばかりではない。そもそもシニフィアンをシニフィアンとするのは、他者の言わんとすることであり、ある種の他者の欲望である。「一つのシニフィアン」を聴取するということは、そのシニフィアンを他者が言わんとしているものとして選び取ることである。ところがラカンにとって他者の欲望は決して事実ではなく、他者についての知が可能になるために必要な一つの想定であり、「公準」であった[28]。他者が欲望するという事態は、他者のこころを一定の決定論に従うものとし、他者についての知を可能にする限りにおいて、主体にとっては望ましい事態である。言い換えれば、主体は他者を知りたいと欲するまさにその限りにおいて、他者が欲望するということを欲望する。その意味で言語的単位＝シニフィアンは、あくまでこの知の欲望に支えられた欲望の欲望の相関項としてのみ現れてくる。そしてここから、主体がシニフィアンから「遠ざかる」、ある独特の仕方が帰結する。主体が自立して存在し続けるシニフィアンを信じることができるとすれば、それは他者の欲望を支えているはずの主体の欲望、他者が欲望するということの欲望が表だって問題にならないからだ。そしてまさにその、主体における他者の欲望の欲望が問題になり、そうして主体は他者の欲望を欲望しないこともできたということが明らかになるとき、垣間見られるのはシニフィアンなき世界の可能性である。要するに揺るぐことのない無限の言語的宇宙の外に出るという不可能な企てにかえて、その宇宙そのものの消失によってそこからいわば

無限に遠ざかるという可能性が、シニフィアン連鎖の概念には内包されているのである。

シニフィアンは「聴覚的」なものである限りにおいて、「バベルの図書館」の堅牢さを持ちえない。といってもそれはたとえば、シニフィアンが安定した形をとどめない、「音声的」なものである、といったこととは関係がない。シニフィアンが不安定なのは結局のところ、それが他を絶して存在しうるものではなく、あくまで聴取と相関して、主体の知の欲望に、そしてそれが動機づける他者の欲望の欲望に――主体の欲望である以上、定まらず、そして有限な欲望に――条件づけられてのみ存在するものであるからである。そしてここからシニフィアン連鎖という言語の場所の「外」を、空間的にではなく、それを条件づけるものとの関わりで規定する道が開かれることになる。

シニフィアン連鎖は、それ自体の消失を考え得るような言語の場所である。しかしその一方で、シニフィアン連鎖なるものは見たり聞いたりできない以上、その「消失」が何を意味するのかもわかりにくい。そこで聴取における言語の場所の経験がどのようなものであるかをもう少し詳細に見てみよう。

シニフィアン連鎖は第一次的には、我々にどのようにして与えられるのか。それは決して無際限に広がる分岐構造が見渡される、という形をとることはなく、むしろ具体的な、規定された欲望をもつ他者の現前という形で現れてくる。すなわち A を言わんとしていることはありうるし B、C を言わんとしていることもありうるが、しかし D を言わんとしていることはないだろう、と私が考えることのできるような他者として現れてくる。シニフィアン連鎖の概念の核にある「可能なシニフィアンの集合」、「A あるいは B あるいは C」という選言的命題は、規定された欲望の論理学的な表現形式なのである。そしてシニフィアン連鎖の「場所」としての安定性は、他者が欲望するということの自明性に帰着する。他者が何かを言わんとしていることについては疑いすらせずに、その何かを知ろうとするときに初めて、主体はシニフィアン連鎖の分岐構造を一つの「場所」として、そのなかを安んじて進んでゆくことができるのである。

「聴取」は主体にとって、自らが進む場所であるシニフィアン連鎖の、ある一定の経験を含意している。それはその場所があることを疑いすらしない、という仕方での経験である。このとき主体は、シニフィアン連鎖に没入し、彼の聴取した一つのシニフィアンに、そのシニフィアンを聴取した行為の主体として内在している。その一方で他者は、そのシニフィアンの先に続くはずの、「可能なシニフィアンの集合」というかたちで、やはりシニフィアン連鎖に局在している。「一つのシニフィアン」の先に「可能なシニフィアンの集合」が描き出され、「可能なシニフィアンの集合」の中に「一つのシニフィアン」が聴き取られるというこの行程が多少なりとも滑らかに進むという事態、シニフィカシオンからシニフィカシオンへの「回付（renvoi）」の運動によって、シニフィアン連鎖への内在のポジションをさしあたり定義することにしよう。

さて、こうした内在のポジションに対して、主体がその「外」を垣間見るポジション

を考えることができる。この経験をどのように理解することができるのか。これは、シニフィアン連鎖がもっている限界の外に踏み出すという仕方ではなく、それを支えていた条件が揺らぎ、あるいは問題化されることによって、主体がシニフィアン連鎖の運動から一定の疎隔をもつようになる、という形を取る。この条件とは、規定された欲望を持つ他者の存在である。そうした他者とは、シニフィアン連鎖の「回付」の運動においては、「一つのシニフィアン」の先に、いわば想像的投射によって描き出される、「可能なシニフィアンの集合」であった。したがって、「回付」の運動に組み込まれたこの「投射」の変調が、「外」の経験を条件づけていることになる。

この変調には二つの種類を区別することができる。まず、投射そのものは機能しており、他者の欲望を現出させるが、その存在が「現実」によって否定され、通常は際だつことのないその虚構性が露呈されるような場合。たとえば排他的な愛の関係の中で、主体と世界の関係がただ一人の他者との関係に縮減されている時に、その他者が（死によって、あるいは別の理由によって）失われてしまうような場合がこれに対応する。もう一つは、回付の機制そのものが何らかの仕方で損なわれてしまう場合で、臨床的には他者との未分化状態がある種の全能感とともに生きられる自我の拡散や、他者がその生き生きした相貌を完全に欠落させる「離人症」の場合がこれにあたる[29)]。いずれにしてもラカンの構想に従うかぎり、こうした異なった前提のもとで追求される他者との関係を、我々はシニフィアン連鎖という形で規定された「場所」としての言語の「外」を構成する次元として考えることができるだろう。

一方に一定の条件のもとで可能になる「聴取」によって規定される次元があり、他方でその前提が通用しない次元がある。「シニフィアン連鎖」として定義された言語の「内」と「外」がある。こう言えばきっぱりと分かれた二つの領域が問題になっているという印象を持たれるかもしれないが、事態はそう簡単ではない。というのも――ここがラカンの理論的な洞察というべき部分であると同時に、そこから別の道がひらかれうるような場所なのだが――ラカンはこの「シニフィアン連鎖」の「外」においても同じ構造が見出される、つまりそこにはある種のホモロジーが想定できると考えるからだ。「聴取」の水準では、他者が何かを言わんとすることは自明視され、他者が何を言わんとするかが求められていた。つまり求められているものは欲望の対象であり、その複数の可能性が問題であった。他方、その「外」では、そもそもその他者が欲望するということが表立って欲望され、その複数のあり方が問題となる。つまり他者が欲望するということの欲望としての要求の、複数のあり方ということだ。換言すれば、「聴取」で他者の欲望の対象をめぐる「あれかこれか」に主体が向き合っていたのと同様に、その外でもまた主体は「あれかこれか」に、しかし今度は「他者が欲望するということの欲望」のあり方をめぐるあれかこれかに向き合うということになる[30)]。

いったん「聴取」の外として規定されたこの次元は、こうして改めて「他の聴取」の

次元として位置づけ直されることになる。いわゆる「グラフ」は、その図式化された表現に他ならない。そしてこの「あれかこれか」を「場所」としての言語の根本的な特徴と考える限り、「他の聴取」もまた、この拡張された主体の「場所」の「中」に位置することになるだろう。しかしそれではこの場所には、いかなる「外」もないことになるのか。換言すれば、この拡張された「場所」としての言語の中には、主体にとっての「すべて」があると言ってよいのか。主体はこの場所から、決して外に出ることはできないのか。この問いに対するラカンの答えは否であり、ここで主体が身を置きうるもう一つのポジションが、やがて（記号 *d* で示される）狭義の「欲望」と呼ばれることになる。

しかし、先ほどの聴取と他の聴取、「欲求」と「要求」が単純に分けられなかったのと同じように、「要求」と「欲望」も単純には分けられない。これは「欲望」という選択肢が、「要求」をめぐる可能な選択肢の一つとして含まれているということによる。つまり「他者が欲望するということを欲望する」主体のさまざまなあり方のうちに、その欲望を放棄する、すなわち「他者が欲望するということを欲望しない」というあり方も含まれているということだ。そして、ラカンが所謂「オイラー図」を援用して行おうとする論理的な分節化が目がけているのは、他でもないこの境界画定の精緻化なのである。

4. 「場所」の密輸入：「オイラー図」批判とトーラス

ラカンにおける「欲望」の次元が、「グラフ」によって明確化されるのと時をおかずして、ある特徴的な「あれかこれか」がラカンの議論の中で主題化される。これはまず、セミネール『欲望とその解釈』の中の、アーネスト・ジョーンズが提示した去勢よりも根源的な欲望の消失、いわゆる「アファニシス」に関する議論のなかに現れるだろう。ジョーンズは、そこで主体が直面するジレンマを「近親相姦的対象か、それとも自分の性器か」というかたちで定式化したが、ラカンはこれを「自分の要求か、あるいは自分の欲望か（sa demande ou son désir）」という二者択一に読み換えた[31]。このセミネールはまた、ラカンが『ハムレット』の「あるべきかあらざるべきか（to be or not to be）」に導かれる形で論理学記号としての「V」ないし「あるいは（vel）」に言及したおそらく最初のセミネールでもある[32]。ラカンのセミネールの議論を通時的に見ると、ここから新たに別の問題の次元が開かれているようにみえる。この特殊な選言的状況にかかわる問題系は、セミネール『同一化』の議論であらためて取り上げられて後、セミネール『精神分析の四基本概念』で「疎外のあるいは」として明確に分節化され、『ファンタスムの論理』でのさらなる展開から『一つの大他者からもう一つの大他者へ』におけるパスカルの賭をめぐる議論にいたる、中期ラカン思想の大きな流れを形成している。シニフィアン連鎖の内包する「あれかこれか」を主題化するこうした流れの中で、論理学とその装置がしばしば参照されるようになるのは、一面で自然なことであったといえるだろう。

このなかで比較的初期、1961–62 年のセミネール『同一化』で導入されているのが、論理的な関係の図示としての、所謂「オイラー図」の装置である[33]。ただその導入は、「欲望」と「要求」の特殊な選言的関係をめぐる彼の問題系によって、独特の仕方で方向付けられている。すなわちラカンは、先行する論理学的な議論の成果を参照するというのではなく、むしろまず、その議論で暗に前提になっているものを批判するために導入するのである。

18 世紀最大の数学者レオンハルト・オイラーは、ドイツのアンハルト・デッサウ王女に、論理学、とりわけ三段論法の諸規則をわかりやすく教えるという目的で、1761 年 2 月 14 日、全称／特称、肯定／否定によって区別される四種の命題の主語と述辞をそれぞれ円によって表すという構想を導入する[34]。

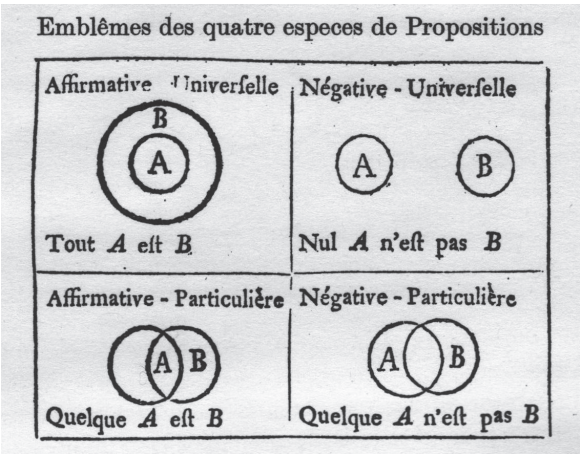

図 3：オイラー『ドイツの王女への手紙』より、書簡 103[35]

ラカンはこの「オイラー図」に 1962 年 4 月 11 日のセミネールでまず言及する。そこで彼が指摘したのは、このいわば「お子様向け」の論理学が、論理的推論の適否を視覚的・直観的に理解させてくれる一方で、ある一定の前提を検討されないままに導入してしまうということであった。

オイラーはこの円の導入に際して次のように説明している。「一般概念は無数の個別的対象を含んでいるので、それはそうした個体全てが含まれた一つの空間と見なされる」(*Lettres*, p. 232)。円はそうした空間の一例として提示されているわけだが (*ibid.*, p. 233)、ここで「含む (renfermer)」ということが意味を持つためには、円はその内側と外側を明確に区別することができるのでなくてはならない。しかし、そうした円は、実は特殊な円、つまりあくまで平面に描かれた円にすぎない。円が、三段論法の図解として機能するためには、その円が平面上に描かれることが、暗に前提されてしまっている。その前提――「一枚の紙」の上に円が描かれるという前提――の上に立つ限り、たとえば二つの

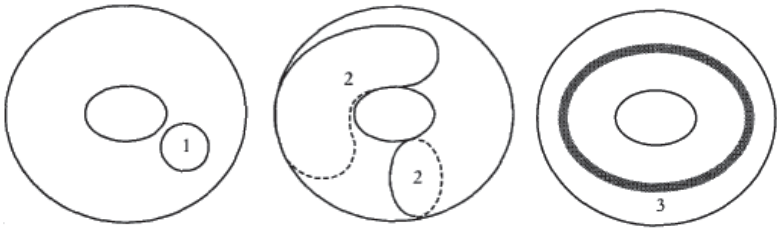

図 4：トーラス上に描かれる円の三種

タイプの「A あるいは B」、すなわち 、いずれでもよい、という意味の「択一的な（alternatif）」「A あるいは B」（A v B）と、どちらか一方という意味で、交わりの部分を含まない「排他的な（exclusif）」「A あるいは B（A か B かのいずれか）」（A w B）を区別することができない[36]。いわんやそれは、欲望と要求の間に存在しそれらを相互に位置づける一つの選言的関係を分節化するには十分ではない[37]。

それでは平面という前提を離れたときに何が起きるのか。トーラスの上に描かれた円の中には、内側・外側のはっきりした円（1）以外に、その区別が自明でない複数の種類の円を描くことができる。たとえば中央の穴を通過するように描かれた円（2）や、中央の穴を取り囲むように描かれた円（3）では、線の右側と左側が結局同じ空間になってしまい、それがオイラー図で果たしていたような役割は果たせなくなってしまう（図 4、*ibid.*）。

また最初の円をどんどん小さくしてゆくと、それが点に縮減すること、すなわち「点化（ponctifi（c）ation）」ないし「点状にすること（rendre punctiforme）」が可能であるのにたいして、残りの二つは（トーラスの厚みや穴に妨げられて）点化が不可能であるという特徴をもつ[38]。あとで見るとおり、ラカンはこの後者のカテゴリーに属する二種の円を用いて、欲望と要求の関係を分節化しようとするのである。

まずセミネール『同一化』の時点で、この関係がどのように位置づけられていたかを確認しよう。

セミネール初期のエディプスコンプレックスないし前エディプス期とエディプス期の過程の総体を表す所謂「〈エディプス〉」をめぐる議論を通じて、ラカンはその出口に想定される父への愛という要素を前景化した。本来のエディプス的関係では、父ははじめ母の心を奪い、子供のもとから立ち去らせる横暴な父である。モノならぬヒトとして母の欲望の対象となるこの父はそれ自体欲望である（想像的な父）。その欲望は主体と同様に有限であり、いつかは消え去ることが見込まれるのだが、その消失は母の欲望を繋留する一切の方法の消失を意味する。こうして母が欲望する欲望を対象とした主体の欲望は、ある独特な形を取るようになる。すなわちそれは一種の「愛の要求（demande d'amour）」なのだが、単に他者の現前を目がけるというのではなく、むしろ他者の欲望

の有限性（現実的な父）に直面しつつなお、その他者が欲望し続けるということを欲望するという形を取るのである。これに呼応して現れるのが、想像的な父の極限形態としての、フロイトの所謂「原父（Urvater）」である。

さてここで重要なのは、この「原父」をめぐって主体が二重拘束的な状況におかれることになるということだ。すなわち、一方でそれは無限の欲望として全ての女性を独占し、その限りで母を主体から遠ざけるような存在として思い描かれるようになる。そして想像的な父が結局、それを欲望する主体の欲望以外に支えを持たない限りにおいて、それを消失せしめるには主体が要求を手放し、父が「欲望するということを欲望しない」だけで足りる。しかし他方でこの欲望し続ける父の存在が母の欲望を方向付け繋留する唯一の手段と目されていた限りにおいて、その消失は主体が母との関係においてみずからを位置づけるあらゆる可能性の消失を意味する。したがって主体は、ペナルティなしに要求から「降りる」ことができない。いったん「愛の要求」というかたちで手を差しのべてしまった――無限であってほしい父の欲望を思い描いてしまった――主体は、瀕死の〈父〉の最終的な死について責任がないというわけにはゆかない。そうした主体に責任のある他者の死は、端的にその「殺害」として表象されることになるだろう。更にこうして簡単に手放せなくなったこの要求は、主体にとって多少なりとも疎外されたものとして、すなわち主体にとって他者であるようなものとして、主体がそれに「対峙（confrontation）」し、それに対する態度を決めることが問題になるような対象として現れてくる[39]。この「しないわけにはゆかなくなった要求」のポジションが、〈エディプス〉の最終局面の初期条件を規定している。

『同一化』の議論は、こうした議論をふまえた上で、両者の関係に言及している。すなわち、

（1）欲望と要求の関係は、〈エディプス〉の中に位置づけられている。「〈エディプス〉とは、特権的な価値を持つようになり、その結果絶対的な命令、法と化した要求と、〈エディプス〉で問題になるような〈他者〉の欲望としての欲望の間の関係である」。ここで問題になっている要求は「私の欲望〔の対象〕であった女を欲望するなかれ（tu ne désireras point celle qui a été mon désir）」という禁止の形を取る、とラカンは述べる。この禁止的要求はさしあたり〈父〉の――〈父〉による――要求だが、過去のものとなった彼の欲望の彼方で望まれる事態を表明しているという点で、現実的な父の彼方で維持されようとする想像的な父、すなわち主体の愛の要求の中で維持される父がなすはずの要求である。この局面において、〈父〉ないし〈他者〉の要求と主体の要求は、必然的な絡み合いを呈することになる。

すでに別のところで述べたように[40]、欲望の弁証法において、主体の「欲望することを欲望しない」はさしあたり、主体による愛の要求の挫折として生きられる。すなわち主体が父が欲望するということを欲望し続けようとして果たせないという事態の確認と

いうかたちで入り込んでくる（「私はもはや〈父〉が欲望することを欲望してはいない、ああ！」というわけだ）。しかしこの事態が、〈父〉がもはや欲望しないことの責任、という形で捉え直されるとき、「欲望しない」には単なる事実確認を超えた、ある種の能動性が入り込んでくる。というのも〈父〉の欲望をもう少しだけ長く欲望することもできたのにしなかったというときにはじめて〈私〉は責めを負う存在になるからだ。そのとき〈私〉は、〈父〉を死ぬに任せた者に、消極的にであれ〈父〉の死に荷担した者に、その殺害者になる。そうして〈私〉は「〈他者〉が欲望するということを欲望しない」者ではもはやなく、むしろ「〈他者〉が欲望しないということを欲望する」者となる。そして上述の「法と化した要求」とは結局、この後者の欲望が〈父〉に――例えば報復への恐れによって――投射的に帰されたものとして位置づけることができるだろう。ラカンがかつて述べていたように、罪責感は、法をまったく参照することなしに生ずる[41]。罪責感から禁止する超自我が生じるのであって、その逆ではないのである。

この投射、この欲望の欲望は確かに「愛」であるのだが、しかし〈母〉への愛とも、そしておそらく本来の〈エディプス〉の出発点で問題になる〈父〉への愛ともことなった、その格別なかたちである。ラカンが上記引用部の少し先で、おそらくは『トーテムとタブー』の原父をめぐるエピソードを念頭に、「父の殺害」――これは主体が責任のある父の死を言うもっとも簡潔な定式であった――のあとに「この父への至高の愛（cet amour suprême pour le père）」が現れることを指摘し、〈父〉の死こそが結局のところ、不在者として存在するということを「かの種の現実性のうちに、おそらくは唯一絶対的に持続する現実性のうちに固定する」のであり、「それ以外に根源的な命令の絶対性の淵源はない」と強調していたことを指摘しておこう（S.IX, 620321）。

この点は我々の議論にとって無視できない重みを持つ。というのは、ラカンはここで、「要求」に今ひとつ別の主体的次元を付け加えているからだ。主体は単に、自らの「要求」すなわち欲望の欲望を没入的に生きたり、それと対峙したりするだけではなく、これを〈他者〉に帰することができる。禁止的な、「欲望しないということを欲望する」「要求」は、〈他者〉のものであることができる。そしてそうした禁止的要求の他者を支える投射は、それ自体或る格別の仕方で「要求」である。言語すなわち限定的なシニフィアン連鎖の外で可能なもう一つのポジションが、あるいはラカンの言い方を借りれば「主体のポジションの根源的な二重性（la duplicité radicale de la position du sujet）」（S.IX, 620321）が、ここではある極限的な姿で示されていると言うことができるだろう[42]。

さて、こうして「要求」が拡張されて再規定されたのに対して、「欲望」はどうなるのか。

（2）ラカンは続く部分で、この二重性がいわゆる「グラフ」の二つの水準によって分節化されたものであるとした上で、これらの水準の間に口を開ける「裂開（la béance）」が、「〈大他者〉に対してなされる「答えよ」という要求（cette demande à l'Autre de répondre）」

の「peut-être rien」と「rien peut-être ?」の間での揺動というかたちをとって現れてくるとする。念頭に置かれているのは、ここでもやはり〈父〉への愛の状況だろう。私は〈他者〉が欲望するということを欲望する。そしてそのとき〈他者〉の応答は、その欲望の現前の徴たる限りで要求される。グラフ下段に位置する「たぶん何も［もはや〈他者〉は答えないのだ］(peut-être rien)」はその要求の挫折の確認であり、〈他者〉の不在の「メッセージ(le message)」として現れてくる。しかしその「何もない (rien)」が〈他者〉の側に事実として帰されるのではなく主体の側の行為として引き受けられるとき、すなわちそれがあくまで主体的な断念であって、断念しないこともできたのだと主体が思い直すとき、可能性は〈他者〉の側に投射される。対応するのはグラフ上段の反語的な「何も［〈他者〉は答えない］とでもいうのかね？(そうとは限らない) (rien peut-être ?)」であり、そこでは確定した応答ないし「メッセージ」ではない、「問い (la question)」の水準が開かれる。より正確に言うなら、「結論づけることの不可能性とともに問いが純粋に存続すること(pure subsistance de la question avec l'impossibilité de conclure)」(S.IX, 620321) の水準が開かれることになる。

すでに述べたように、この水準に位置づけられる、主体の〈他者〉への要求の極限において、主体の (による) 要求から〈他者〉の (による) 要求がいわば捻り出されてくる。これを上では「投射」という言い方で述べたが、むしろ同じ構造のなかでの異なったポジションの取り方として理解した方がふさわしいだろう。〈他者〉が答えること能わず、その応答が不在であるときに主体が対峙することになる「無 (rien)」は、はじめあくまで〈他者〉の「無」として――〈他者〉が「何も (rien)」答えないこととして――出会われるが、ついで主体の欲望の (有限性の) 帰結として成立する「無」として引き受け直される。こうして「〈他者〉が欲望するということを欲望しない」から「〈他者〉が欲望しないということを欲望する」が生成する。そしてこの「〈他者〉が欲望しないということを欲望する」という特異な「要求」を自ら引き受け、あるいはそのうちに沈潜する (「罪責感」) かわりに、そこから離れつつそれを〈他者〉に帰するということが、同時に禁止の絶対的命令であり至高の愛でもあるようなものを構成するというわけだ。

さて「欲望」は、この「〈他者〉が欲望しないということを欲望する」の二つのポジションとの関わりで規定することができる。この最後のポジション、すなわち禁止の絶対的命令という形での〈他者〉の要求が主体に現れてくるとき、それはある独特の仕方で〈他者〉が欲望するということの実現――〈他者〉がその死後もなお欲望し続けるということの実現――であり、主体の (禁止的な仕方であれ〈他者〉に欲望し続けていて欲しいという) 要求の成就である。ただしこれが実際に成就であり、主体がそうしたポジションを占めるということが成立するためには、一つだけ条件がある。すなわち、〈他者〉の欲望がそもそも主体の要求に由来する (かもしれない) ということが、考慮の外に置かれる限りにおいて、という条件である。ここで問題になっている〈他者〉の要求が、主体が

「〈他者〉が欲望しないということを欲望する」から離れてそれに対して再帰的なポジションを占めることによってのみ支えられているのを忘れることで初めて、この〈他者〉の禁止的な要求は、語源的な意味における「絶対的な（absolu）」な要求として現れてくる。換言すれば禁止的な要求を携えて現れる〈他者〉はある影の部分をもたざるをえないのであり、この影の部分にこそ「欲望」は位置づけられるのである。

> つまり〈他者〉は何も答えません。確かなことなど何もない、ということ以外は、なにも答えません。ただ、これが意味することは一つしかありません。すなわち〈他者〉がそれについては何も知ろうとしないことがあるということです。〈他者〉は、この「問い」については何も知ろうとしないのです。
>
> ここで、〈他者〉の無力（l'impuissance de l'Autre）は一つの不可能（un impossible）に根ざしています。それはまさに同じ不可能、主体の問いが我々をそれに向けてすでに導いてきた不可能です。「ありえない〔＝可能ではない〕（Pas possible）」とは一なる徴（le trait unaire）がその分割的な価値において突如出現した、あの空白だったわけですが[43]、ここで我々はこの不可能（cet impossible）が体を具え、さきほどフロイトが規定したのを見た、根源的な禁止における欲望の構成といったものと結び合うのを目の当たりにするのです。
>
> 〈他者〉が答えられないという無力（L'impuissance de l'Autre à répondre）は、一つの袋小路に起因しています。この袋小路は、我々も知るとおり、〈他者〉の知の制限と呼ばれています。「彼は自分が死んでいることを知らなかった」、〔つまり〕他者は、受け入れられたというのではなく被られた死、主体の欲望によって被られた死によって初めて自分が〈他者〉の絶対性（absoluïté）に辿り着いたのだということを知らなかった、というわけです。
>
> このことを主体は、こう言ってよければ、知っているのです。〈他者〉がそれを知ってはならないということ、〈他者〉は知ることがないよう要求しているということ〔を知っているのです〕。それは、二つの混じり合うことのない要求、主体の要求と〈他者〉の要求の特権的な部分です。というのは欲望がまさに、これら二つの要求において、言われるべきでないものの交わりの部分（l'intersection）として定義されるものだからです。そこから出発して初めて、これらの要求が解放されます。それらはあらゆるところで明言されうるのですが、ただ欲望の領野だけは例外なのです（S.IX, 620321）。

ここで言及されている「彼は自分が死んでいることを知らなかった」は、ラカンがセミネール『欲望とその解釈』で詳細に論じた、フロイトの報告した夢の例[44]に由来する。「ある男が父が長い間苦しんだ不治の病気を看病したが、父の死んだ翌月に何回も次のよ

うな夢を見たという。父がまた生き返って、昔のように彼に話をしている。ところが彼は、父がもう死んでしまっているのに、それを知らないでいるのを非常に心苦しく感じていた」[45]。フロイトはこの夢を、「父がもう死んでしまっている」という言葉に「彼が望んだとおり」あるいは「彼が望んだために」という言葉を付け足し、最後の「父がそれを知らなかった」に「彼がそれを望んでいたことを」を付け加えることで理解しようとする。長い看病の過程で疲れたこの男性のこころに萌したはずの「死が〈父〉の苦しみを早く終わらせてくれればよいのに」という想い、主体による〈父〉の死の願望――〈父〉がもはや欲望しないということを欲望する主体の欲望――がまさに脱落していることで、この夢の荒唐無稽な外見が生じている、というわけだが、ラカンはその再解釈のなかで、この夢の顕在的な二つの部分、「彼［父］は知らなかった（il ne savait pas）」「彼［父］が死んでしまっている［ことを］（il était mort）」をそれぞれグラフの上段と下段に位置づけた上で、「彼［主体］が望んだとおりに」という部分をそれらの間に、すなわち（狭義の）欲望（*d*）と幻想（$ ◇ a）が置かれた水準に位置づけている[46]。この水準と上段・下段との違いは、形こそ違え〈他者〉（A）ないし欲望する他者への関係が維持されているかどうかという点だ。「〈他者〉への関係」（あるいは広義の「要求」ないし欲望の欲望）ということで総括される主体の可能な存在の領域はそれ自体広大であるが、全てを覆い尽くすわけではない。たしかに他者が欲望するということを自明の前提として展開される本来のシニフィアン連鎖の領域はそもそも無限の広がりを持っているし（グラフ下段）、その前提自体が揺るいだところでも、主体の存在様態は〈他者〉との関わりで、その欲望するということを欲望するかたちで規定されうる（グラフ上段）。ただその領域には、一種の「暗点」がある。「〈他者〉に対して構造的に隠されたもの（ce qui est caché à l'Autre par structure）」、「〈他者〉に対して隠された要求の部分（la partie de la demande qui est cachée à l'Autre）」（S.IX, 620321）が存在するのであって、ラカンは（「要求」と対立した意味での）「欲望」がまさにそうしたものとして構成されると主張するのである。

この「欲望」はある意味で、欲望の弁証法の端緒において、知を目がけた急ぎの機能のなかで通過された契機への回帰であり、「欲望の公準」の動揺、〈他者〉の欲望を欲望する主体の欲望の再問題化である。シニフィアン連鎖を離れたところでも、主体があらゆる犠牲を払ってその維持を欲望してきた〈他者〉の欲望、〈他者〉が欲望し続けるということ。その極限的な形式が、超自我であり、その禁止的な要求だとするなら、この要求があくまで〈他者〉のそれとして、つまり主体と離れて（「絶対的に」）存在するものとして現れてくる限り、主体にとってこの要求は構造的に隠された部分を持つことになる。その一方でもし主体がこの〈他者〉の要求の隠れた部分、その主体的な根を見てとるとするならば、つまり主体が自らの、〈他者〉が欲望するものであって欲しいと願う欲望、自分が持っている、この〈他者〉の欲望の欲望を見てしまうとするならば、〈他者〉の欲望は、主体の欲望に応えて現れた想像（イマジネール）的な幻影にすぎないものとなり、主体は（主体と離

れて存続しうるという意味で「絶対的」な)〈他者〉の欲望を失うことになるし、また主体の欲望も有限であることから、最終的には全てが失われてしまうことになる。「〈エディプス〉とは、特権的な価値を持つようになり、その結果絶対的な命令、法と化した要求と、〈エディプス〉で問題になるような〈他者〉の欲望としての欲望の間の関係である」とラカンは述べていたわけだが、エディプスの極限に見出されるこうした要求と欲望の関係は、したがってある特殊な「あれかこれか」の関係――あくまで〈他者〉のみに目を向けることで不完全な、影の部分を持った〈他者〉を手にするか、あるいは自らの欲望に目を転じて全てを失うか――として規定されることになるわけだ。

この特殊な選言関係の分節化の文脈で、オイラー図で図解された上記二つのタイプの「あるいは (ou)」――A、B、またその交わりを含む「包含的 (inclusif)」選言および A のみ、あるいは B のみで交わりを認めない「排他的 (exclusif)」選言――が主題化される (S.IX, 620328)。

(3) このセミネールでラカンは、ジョーンズのアファニシスをめぐる議論を「〈エディプス〉の効果 (l'effet de l'Œdipe)」を定義するものとして位置づけ、彼が〈エディプス〉の主体が直面する二者択一を述べた定式「近親相姦的対象か自身の性器か」を「〈他者〉が、対象「あるいは」欲望を禁止する」とパラフレーズした上で、「私のいう「あるいは (ou)」は、排他的に見えますが、まったくそうというわけではありません (Mon *ou* a l'air exclusif. Pas tout à fait)」と述べている。

この部分否定をいかに理解すべきか。まず必要なのは、ここで提示されている選言的関係を、先に見た「要求」と「欲望」の選言的関係とのかかわりで位置づけるということである。その形式からも明らかなとおり、これは他者の禁止の二つの選択肢を示すものであり、他者の禁止的な要求自体が、主体にとって可能な二つのポジションを持つことを示している。上の議論で我々は、主体が〈父〉への愛の挫折の中で「〈他者〉が欲望しないということを欲望する」ポジションに到達し、さらにこのポジションを〈他者〉に帰することから〈他者〉の禁止的な要求が成立する、というプロセスを想定していた。ただ、このプロセスでは、禁止が欲望そのものに関わるのか、それとも対象に関わるのかという区別、すなわち〈他者〉は「主体がそもそも全く欲望しないということを欲望する」のか (つまりその「死」を欲望するのか)「主体がある特定の対象を欲望しないということを欲望する」のかという本来立てられるべき区別が言及されてこなかった。「〈他者〉が、対象「あるいは」欲望を禁止する」という定式は、この〈他者〉に帰された要求の可能な二形態を改めて明示するものとして捉えることができる。

この選言的な要求を、ラカンはさらに次のように敷衍して述べる。次の何れかだ。すなわち「おまえは私、死せる神が欲望していたものを欲望し、そうして私の存在の証拠としてはただ――といってもそれで十分なのだが――その欲望の対象をおまえに禁ずるこの命令、或いはより正確には、おまえにその対象を失われたものの次元において構成

させるようなこの命令しか存在しないということになるか――[そのとき] おまえは何をしようとも、別の対象しか見いだせず、決してその対象そのものは見いだせない――[……] あるいはおまえは欲望を放棄するか」(S.IX, 620328)、そのいずれかなのだ。

これらの要求は、いずれも〈他者〉の要求であり、これをそうしたものとして受け取る限り、主体は〈他者〉の欲望をあくまで自分とは離れて存在するものとして、これに対峙するポジションを占めている。これはこの命令が〈他者〉の「存在の証拠」であると言われている前者においてだけでなく、後者においても変わらない。そしてこのとき、「欲望」の次元、〈他者〉の二重の要求を支えているかもしれない主体の「欲望」の次元は、構造的に隠された部分に位置している。

しかし主体がこれらのいずれかを選ぶということになったとき、その帰結は大きく異なっている。なかでもここで特に注目したいのは、欲望の放棄の要求に主体が従う場合である。この放棄が、端的に欲望することをやめる、すなわち死ぬ、という形を取る場合、生じる事態は主体が全てを失う、ということになる。ただラカンは、もう一つ別の「放棄」の形を考える。すなわち、「抑圧」という形の放棄である。

> この消滅する欲望、おまえ、すなわち主体が放棄する欲望。私たちの経験は、次のことを教えてくれているのではないでしょうか。すなわち、それが意味しているのは、そのとき以降、おまえの欲望がたいへんうまく隠されて、束の間不在のように見えるようになるだろう、ということなのです。いわばその欲望は、私たちが見てきたクロスカップ式に、反転して要求になるのです。[……]
>
> しかし結局のところ、この隠された欲望とは、何のことでしょうか。他でもない、我々が経験のなかで、抑圧された欲望と呼び、そのようなものとして発見しているものです (S.IX, 620328)[47]。

ここで欲望から要求への反転、と言われている事態はまず、古典的な投射による防衛機制によって理解することができるだろう。主体における〈他者〉の欲望の欲望ないし要求の挫折は、まず事実確認としての「他者が欲望するということを欲望しない」である。しかしその挫折が、主体が十分要求しなかった結果であるとみなされるとき、この「他者が欲望するということを欲望しない」は、意志としての「他者が欲望するということを欲望しない」こととして、すなわち「他者が欲望しないということを欲望する」こととして捉え直される。罪責感を生じせしめるようなこうした否定的な要求は、〈他者〉の領域の外に出ようとする狭義の欲望 (*d*) でもあるのだが、これが他者に投射されて禁止的な要求となることで、主体はそれを自らのものとして認めずにすむようになる。これには罪責感の回避のほか、他者の欲望を支える主体の欲望そのものの問題化の回避という効果が伴うだろう。そしてこの禁止的な要求のもとで、主体の欲望 (*d*) はまさにその

要求に応えるものという位置を得ることになる。ここでは欲望から要求への反転に加えて、要求から欲望への反転の関係もまた、その筋道を描かれているということができるだろう。

こうした要求と欲望の反転可能な関係を提示するためにラカンが援用したのがトーラスのトポロジーであり、これらは最終的に、トーラス上に描きうる二種類の点化不能な円の組み合わせによって表される。これには二つのバージョンがあり（図 5）、中央の穴を取り囲む円（1）を欲望に、トーラスの穴を通してコイル状に描かれる円（2）を要求に対応させる点では共通しているものの、二つのトーラスを組み合わせ、一方のトーラス上の要求すなわち円（2）が他方の欲望すなわち円（1）と重なり合う形になっているものと、一つのループがトーラスの穴を通る円とそれを巡る円を一続きで実現しているものがある。

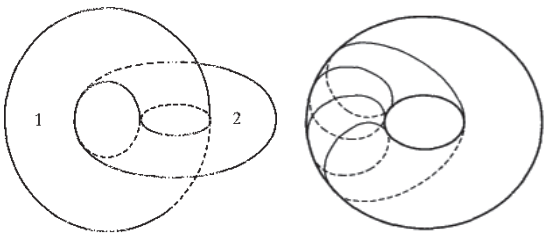

図 5:「要求」の円と「欲望」の円の組み合わせ

トーラス中央の穴は、ラカンによれば、「全ての要求のもとにおかれた換喩的対象（l'objet métonymique sous toutes ces demandes）」を具体化するものであり、ここに最終的に所謂「対象 *a*」が置かれることになる。トーラスの穴を通る円で表される一回一回の要求は、それに到達しようとして果たせない。しかしその挫折の反復において、一つの領域が反転した形で浮かび上がってくる（図 6）。

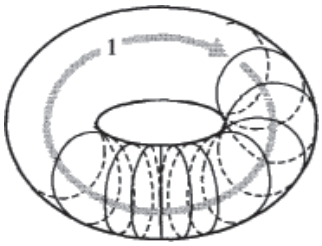

図 6:「要求」の反復が描き出す「欲望」

こうして要求というポジションからは、否定的にしか捉えられない境域を、そのものとして措定する、もう一つのポジションが考えられる。これが欲望のポジションである。

確かに要求が無限回繰り返されることによって、実際にある領域が囲まれるということはありうるだろう。しかし人間的な欲望の有限性は、そうした無限を引き受けることがかなわない。したがってこの欲望の運動は、決して閉ざしきれないこの境域を、閉じたものと「する」というところに存する（ここからのちに要求 D と対象 *a* の反転可能性が主張されることになるだろう（S.IX, 620530））。そしてそれは、主体が要求の閉じ込められたトーラスの表面から離れ、それに対峙するというポジションをとることと相関するだろう。上で見たトーラスの二つのモデルのうち、前者はその間主体的な構成の可能性を示唆するものである一方で、後者は一方から他方への反転の可能性――そしてその運動がくくり出し、あるいは囲むものの連続性――を強調するものであるということができる。

5. 場所（トポス）と言語（ロゴス）の更新された関係―ラカンによる「オイラー図」

オイラー図において円は、内側と外側を区別するものとして機能していた。ラカンはオイラー図批判のなかで、この機能が平面を暗に前提していることを指摘し、トーラス上にはそうした機能を持たない二種類の円を描きうることを示した上で、それらの円を精神分析に固有の論理の分節化に利用する。それは要求と欲望の関係の論理であり、トーラスのトポロジーはこれを包摂ならぬ反転の論理として示すものであった。ただしこのことは、ラカンがこのあとあらためてオイラー図を利用することを妨げない。たとえば、『同一化』の翌年の『不安』のセミネールで、オイラー図は男性と女性の関係あるいは欲動の対象の特定のレベルに対応する主体と他者の関係を議論する文脈で再登場する（「S の A に対する関係における *a* の構成の五つの段階」）[48]。そして続く『精神分析の四基本概念』では、オイラー図はより一般的に、主体と他者の関係を分節化する際に登場してくる。さらにその異型は後のファンタスム概念の分節化の過程でも継続して使われるだろう（『ファンタスムの論理』『精神分析的行為』など）。

『不安』のセミネール以降のラカンによるオイラー図の導入は、上で整理した要求と欲望の関係を経て主体が向き合うことになる、特殊な選言を分節化する必要性から理解することができる。このとき二つの円は、この選言の中で提示されるそれぞれの選択肢に対応することになるわけだが、しかしそれらはもはや単純に内外を分割するものとして理解されてはならない。それぞれの円が囲い込む領域は、その内部に外部への通路を抱えもっているのであって、まさにそのことが一方から他方への反転の可能性を支えているのである。

問題の選言的関係とは、エディプスの弁証法の極点で、その効果として位置づけられる、理論化する我々の観点からすれば「要求か欲望か」と定式化され、エディプスの主体の観点からすれば「近親相姦的対象を諦めるか、あるいはファルスを諦めるか」とい

う〈他者〉の禁止的要求のかたちで定式化されるような関係である。これらはいずれも一方を選べば一部の欠けた不完全なものが得られ、他方を選べば全てが失われる、という非対称性を特徴としている。

『精神分析の四基本概念』のなかでオイラー図は、まさにこうした選言的関係の分節化の文脈で導入される。よく知られているとおり、ラカンが例として示しているのは「金か命か」という二者択一の例だ（図 7）。

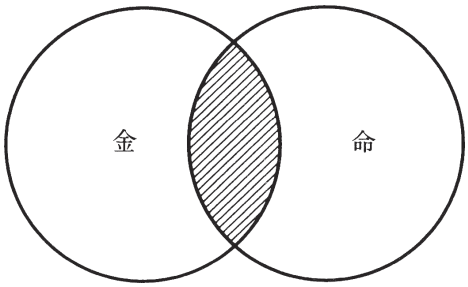

図 7:「金か命か」[49]

強盗に金と命の何れかを選べと迫られたときに、命を選べば金なしの命が残る一方で、財布を選べば殺されて両方を失うことになる。ラカンはこれを「疎外するあるいは（vel aliénant）」と呼んで、『同一化』のセミネールで「エディプスの効果」として取り出したのと同じ選言的関係を主題化する。ただ異なるのは、この関係が主体と〈他者〉の関係に一般化されている点である。問題のオイラー図を見てみよう（図 8）。

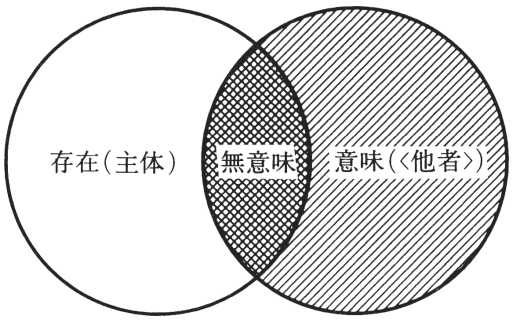

図 8:「疎外」の図式[50]

右側の円を〈他者〉の領域と見なすとするなら、こうした選言的関係はそもそも限定的なシニフィアン連鎖の水準から成立していたことがわかるだろう。というのも、主体はそのときもっぱら〈他者〉の言わんとすることを知ろうとしているのであって、〈他者〉は（自分がそう欲望するまでもなく）当然欲望するものだと思っていたからだ。換言すれ

ば、さしあたり主体は〈他者〉が欲望するということは事実であると思っており、自らの、〈他者〉の欲望の欲望がそう思わせているとは考えない。このとき主体にとって〈他者〉の欲望は、その起源を隠された部分として持つことになると言える[51)]。すなわち我々はこの水準でまず、〈他者〉の円が主体に対して一部を欠いたものとして現れてくるのを見ることになるわけだ。

〈他者〉の欲望の自明性が揺らいではじめて、この欠けていた部分に位置する起源の問題は提起され、次いで主体が持つ、〈他者〉の欲望の欲望の次元が接近可能になり、〈他者〉の欲望の問題を最終的に主体の欲望の問題に帰着させる道が拓かれる。別の言い方をすれば、最初隠されていた図の交わりの部分が明るみに引き出されることで、左側の円が示しているもう一つの選択肢、すなわち他者に寄りかかることをやめて主体として自立的に存在することをめざす、「存在（主体）」の選択肢が明らかになるのであって、その限りでこの交わりの部分は〈他者〉の円のうちにありながら、そこから主体の円へ出て行く通路になっている、と言うことができる。

この左側の円へと抜け出た主体にとって、〈他者〉の欲望が幻影に過ぎないものとなり、主体の欲望とともに消え失せるであろうものになってしまうということ、このことが主体の運動の揺り戻しを動機づける。〈他者〉の欲望の現前をもはや無邪気に信ずることもできず、またそれを自分が際限なく支え続けることにも困難を覚えはじめた主体は、上で見たように、まさに自分が〈他者〉が「欲望するということを欲望しない」ことをひな形として、〈他者〉の欲望をその禁止的な要求という形で維持しようとする。ただしこの〈他者〉の要求は、それ自体二重の要求とならざるを得ない。すなわち、それは「欲望するな」すなわち「欲望しないということを欲望する」という〈他者〉の要求の二つの解釈であり、ある特定の対象を欲望しないことを欲望するか、そもそも欲望すること自体をやめることを欲望するのかのいずれかである。前者の意味で理解された要求に従う限り主体はある特定の対象以外の対象を欲望することになるが、後者の意味で理解された要求に従う限り主体は結局すべてを失うことになる。というのも端的に欲望しない、ということはすなわち「死」を意味するからだ。

『精神分析の四基本概念』のオイラー図を、要求と欲望の分節化の試みの延長線上に位置するものと考えたときに注目すべきは、ラカンがこの図を、主体が二つの円の間を行き来する一種の運動の「場所」として、すなわち「疎外」と「分離」の往復運動が生ずる「場所」の分節化として考えるようになっているという点である。この選言的関係の力動化は、すでに『同一化』のセミネールで要求と欲望の関係を反転可能なものとして捉えるという構想の中で予描されていたわけだが、『不安』でその関係が欲動の複数の段階に位置づけられたのを経て、『精神分析の四基本概念』ではそれが主体の往復運動の一般的な場所として明確に位置づけられる。さらに、このセミネールではこれが一つの明確なモデルを持つようになる。すなわちデカルトのコギトである。

思考があくまで言語をベースに展開されるとすれば、主体はさしあたって〈他者〉の中にあらかじめ刻み込まれた道筋を辿り、あるいは〈他者〉においてすでに欲望されていることを欲望する、という形で考えている。この場合、思考はあくまで他者の側にあり、主体はそれぞれの思考についてその都度定まるにすぎない。この関係は、シニフィアン連鎖と通常の聴取の関係になぞらえて考えられており、そのことは『精神分析の四基本概念』の議論からもうかがえるが[52]、これは主体がさしあたって〈他者〉の中に埋没し、あるいは〈他者〉にとらわれている「疎外」の状況ということができる。そこでは〈他者〉とはことなったものとしての主体の存在は最小限に縮減されているが、かといって〈他者〉から完全に離れても、主体は失われてしまうだろう[53]。ただ、主体はそこから離れようとすることが出来る。そうした「疎外」の状況を条件付けていた「欲望の欲望」のあり方に、変更を加えることが出来る。言い換えれば隠された「欲望の欲望」を明るみに引き出し、その二つの否定的可能性を問題にすることができる。すなわち一つは「〈他者〉が欲望しないことを欲望する」であり、もう一つは「〈他者〉が欲望することを欲望しない」である。世界のあらゆるものを疑おうとする思考、この誇張的懐疑がまず「コギト」と呼ばれていたわけだが、このコギトは前者の否定的契機に対応する[54]。しかし前者の否定は、後者の否定と容易にすり替わる。この「欲望しないことを欲望する」から「欲望することを欲望しない」への反転の可能性を、ラカンは「欲望することを欲さないことと欲望すること、この二つは同じこと」なのだという言い方で指摘していた。「欲望するということの中には、欲望することと欲望することを欲さないこととを、おなじものにしてしまうようなある種の防衛の契機が含まれています。欲望することを欲さないということ、それは欲望しないことを欲するということです」[55]。それはメビウスの輪のようなものであり、「主体は、その輪のある面を歩いてゆけば、いずれはその面の裏張りをしていると想定されるような、もう一つの面に出てしまうことを知っているのです」とラカンは述べるだろう（*ibid.*）。

実際このメビウスの輪の比喩は、ここで問題になっている事態を思いのほかうまくとらえさせてくれるもののように思われる。コギトというかたちで〈他者〉が「欲望しないということを欲望する」ことを突き詰めると、主体は自らを存在させてくれていた〈他者〉というよりどころを失い、消失する。すなわち自己抹消的な「欲望するということを欲望しない」に逢着する。これが少なくとも、オイラー図における左の輪の選択肢――「金か命か」における「金」の選択肢――の示唆していることであった。しかしコギトにおいては主体は非存在のうちに沈み込む代わりに、むしろ存在の確言が生じている。要するにコギトにおいては、分離の先に逆向きの反転が、主体の消失を意味する「欲望するということを欲望しない」からその主体を問題にできるような「欲望しないということを欲望する」への反転がさらに生じているのである。

こうした移行の瞬間はラカンにおいて、ここでのコギトへの言及によってはじめて気

づかれたというわけではない。6年前のセミネール『無意識の形成物』の時点ですでに、ラカンはすでに「ひょっとすると、それ〔コギト〕は一つの機知にすぎないのかもしれ」ないという洞察を述べていた[56]。当時は展開されないままにとどまったこの洞察だが、シニフィアン連鎖の構想の「グラフ」への拡張およびオイラー図による特異な選言的構造の分節化を通過したセミネール『精神分析の四基本概念』の議論は、これにその本来の射程を与えることを可能にする。

ラカンは機知を、「意味の少なさ（peu de sens）」から、「意味のなさ（pas de sens）」への移行の構造によって説明しようとした。すなわちそのもたらす快を、辞書的な（シニフィアン連鎖の内部における）意味を持たない言葉を聴取した主体において生ずる、意味を表立って問い、あるいは求める「要求」のポジションから、「意味などないのだ」という無意味の承認へ至る、解放的移行によって理解しようとした。そして『精神分析の四基本概念』のラカンによれば、コギトもまたこれと同じ構造のなかに収まるものである。さしあたってそれがあるかないかを思い煩う必要なく展開される思考――『無意識の形成物』では「我思うごとく我在り」の前提となる「我呼吸するごとく〔＝自然に〕我在り」（*ibid.*）と呼ばれていた思考――これをラカンは「思っている（cogitans）」という表現で表す。その含意はこれを本文中に残したALI版（およびそのもとになっているタイプ版）でいっそうはっきりしているので、ここではそちらを参照しよう。

> ［……］もし何かが我思う（コギト）の過程によって創設されるとするなら、それは〔おそらく図9の右下部分を指して〕ここにある一つの思っている（コギタンス）（un cogitans）であり、一つの次元であって、延長との対立から抽き出されたものとしての、思考の界域です。それは現実に、その最も脆弱な点であることにかわりはありませんが、しかしもちろんそれに十分な身分（ステータス）を、シニフィアン的構成の領域において保証してくれます（S.XI, 640422）。

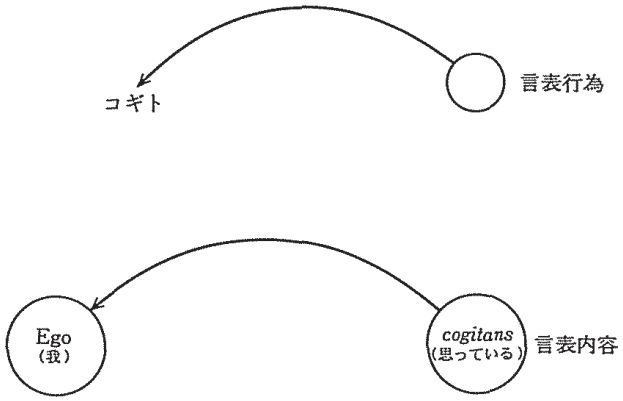

図9:「コギト」のグラフによる図解[57]

「延長（l'étendue）」との対立は、ここで「一つの思っている（un cogitans）」という表現に、デカルトのいう「延長ある事物（res extensa）」に対する「思惟する事物（res cogitans）」、すなわち自立して存在することが確信されている思考の含意を認めることを可能にする[58]。つまりそれは、在ることは疑われず、どれを選ぶかが問題となるようなシニフィアンであり、それを選ぶことによりその行為の主体として一つの私が定まることになる。ALI 版（およびタイプ版）の続く部分は、こうした読み方を支持するように思われる。

> じっさい〔おそらく図 9 の左下部分を指して〕ここにある私が、それ〔そうした「一つの思っている（un cogitans）」〕の帰結であるようなものとして示されうるということ、このことが主体に確信を与えます。言表行為の水準において、〔図 9 の左上の〕この場所を占めているコギトに対して与えるのです。ただ申し上げておかなくてはならないのは、この〔「コギト」の置かれた水準における〕「我思う（je pense）」の身分は、先ほどみた「私は嘘をついている（je mens）」と同じくらい、縮減され、最小化され、点状に（ponctuel）なっており、同じように「それはまったく意味がない（ça ne veut rien dire）」というあの含意を割り当てられうるようなものになっている、ということです。
>
> というのもこの「我思う」はおそらく、〔「一つの思っている（un cogitans）」の意味での〕「我思う」のあらゆる意義に関する絶対的懐疑によってのみ自らを確立する「我思う」であることにより、そうした点的なあり方（cette ponctualité）に縮減されて、おそらく我々が「私は嘘をついている」について指摘したよりもさらにいっそう脆弱でさえある身分を持っているのです。

ラカンはここで「我思う（je pense）」のうちに二つのレベルを区別している。すなわち一方で自立した一つのシニフィアン、「一つの思っている（un cogitans）」ないし「意義」を次々と聴き一取る「思考」の水準と、他方でその水準を超え出てもはやシニフィアンの「物」的な自立を前提とせず、いわばそれに次々と疑問符を付けてゆく「絶対的懐疑」の水準である。この後者の「我思う」は、それがシニフィアンの領野のそれ自体シニフィアン的な否定であるまさにその限りにおいて、「〈他者〉が欲望しないということを欲望する」であり、ある種の「要求」であるわけだが、このラカン的な「コギト」において、主体はもはやシニフィアンの「事物」的な自立に寄り掛かり、あるいは内在することができず、それによって極度に脆弱な存在論的地位に置かれている。あるいはそれは、主体が自らの住まいとも足場ともなったはずのシニフィアンの「事物」的存在領域の円周を縮減し、「点化」せんとする営みであって、これが実際に「点」に至り無に帰する手前で、つまり「〈他者〉が欲望しないことを欲望する」が端的に「〈他者〉が欲望するということを欲望しない」という自己抹消的な帰結に至る手前で、メビウスの輪の表面上のさ

らなる反転が生じ――「欲望するということを欲望しない」から「欲望しないということを欲望する」への反転、穴すなわち対象 *a* の構成を軸とした反転が生じて――存在の確信が生起する。そして絶対的懐疑の「我思う」にその可能性が認められている「それはまったく意味がない（ça ne veut rien dire）」は、「意味のなさ（pas de sens）」ないしは「ナンセンス！（Pas de sens !）」の更新された表現として、ラカンの考えるコギトの出来事の、機知のそれとの親縁性を最終的に印づけている。

こうしてラカンのこの時期の構想には、デカルトのコギトを一つの範例として、先行するシニフィアンを中心とした議論を再編成するということが属していたと言うことができるだろう。

6. 後期ラカンの方へ：「分離」の彼方

ラカンにとって「オイラー図」は、それ自体「場所」として定義された「言語」的な関係を出発点として理解された、主体の壊乱と欲望の弁証法が展開されるもう一つの「場所」のコンパクトな表現となっている。ただその見かけ上の単純さが、そこに畳み込まれた関係の多様性を覆い隠すことがあってはならない。範例としてのコギトの導入は、その意味でまず、それが問題の関係への、異なった視点を提供するものであるという点から評価されるべきだろう。〈エディプス〉の過程で「欲望の欲望」の否定という契機はまず〈父〉への愛の挫折ということで考えられており、その結果生ずる〈他者〉から遠ざかることは、いわば望まずして出来する不可避な破綻という観点から理解されていた。これに対してコギトにおける〈他者〉からの遠ざかりは、むしろそれ自体意志されるものとして提示されている。「欲望の欲望」の否定をめぐる異なったポジションの存在は、絶望的な〈父〉への愛からの脱出の試みとして、あるいは、要求とは異なった、自らに固有の欲望を持とうとする志向として[59]動機づけることができる。要するに要求の中で骨がらみとなった〈他者〉から離れること、いわゆる「分離（séparation）」には、単に主体の存在の喪失というのとは異なった帰結と意味が考えられるということであり、「一つの修練（une ascèse）」としてのコギトは「何か分離されたものの創設」にいたる[60]、その一つのあり方を提示するものであるということができる。

ただしここで要となる「欲望の欲望」の否定には、コギトほどうまくゆかない、他のさまざまな形が考えられるのもまた事実である。この否定が〈他者〉の殲滅という形を取るサド的なファンタスムはその一例であろうし[61]、欲望の放棄という選択肢が「分離」の課題のもっとも極端な、あるいは「最終的な」解決、つまり自殺に向かって開かれているという可能性も否定できない。さらにより根源的な水準において考えるとするなら、ラカンが特異な選言的関係として、オイラー図を利用することで示している、この主体の場所そのものが、果たしてつねに成立するはずのものであるかどうか。それが一連の

プロセスを通じて成立するものとされている以上、そこにはつねに逸脱の可能性が、選択肢そのものの不成立を含意しているような別の可能性が潜んでいるのではないか。こうした問題は、いわば狭義の「欲望」ないし「欲望 (*d*)」の範例であるコギトだけを取り上げることによっては必ずしも明らかにならないのだ。

そしてこの点を明確にするということが、後期ラカンの作業の中心をなしているように思われる。ここまで見てきたような問題の枠組は、最終的にファンタスムの構造と、そこで成立する (〈他者〉へ向かう) 疎外と (主体へ向かう) 分離の二相という形で仕上げられてゆくわけだが、このうち疎外から分離へのターンを焦点化した『精神分析の四基本概念』の議論に対して、分離から「疎外」へのターンを問題化するのが、1960 年代半ば以降のラカンの議論の重要なトポスを為している、ということだ。懐疑論者に再び神に賭けるように促すパスカルの賭をめぐる議論は、その最初の大規模な展開ということができるが、ラカンの議論はその後、分離がいかにして不完全にとどまるかという点の解明に、その解決を求めるようになっているように思われる (「四つのディスクール」)。これらの議論の中心につねに「対象 *a*」が置かれているのは他でもない、これが主体と〈他者〉の円の交わりに位置し、両者の間での移行を可能にするものであったからだ。そしてこの、「対象 *a*」がもつ主体の場所の「要」としての機能を主題化するのが、ボロメオの輪をめぐる議論である。

セミネール『同一化』に現れる、トーラス上に描かれたオイラー図様の図式に次のようなものがあった (図 10)。

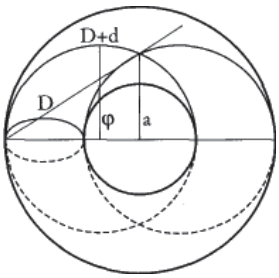

図 10[62)]

この図で二つの円の「点化」を妨げ、それらが離れてしまわないようにしているのは、*a* という名を与えられた中央の穴であった。同様にボロメオの輪においても、〈他者〉と主体ならぬ S (象徴界) と R (現実界) の輪がバラバラになるのを防いでいるのはやはり *a* と名指された穴なのだが、その穴は、もう一つの輪 I (想像界) があることによってはじめて真の穴として機能する (図 11)。

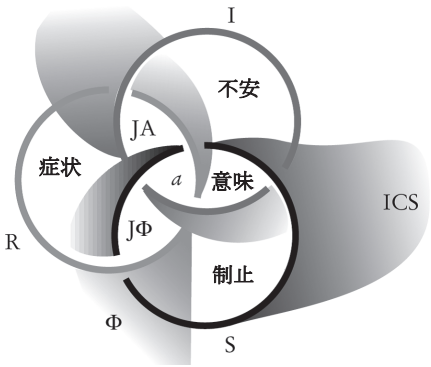

図 11[63)]

「疎外」とは異なった形で評価された、この新しい想像界（イマジネール）の探究が、「もう一つの〈他者〉」から出発し、サントームの概念にいたるラカンの後期の議論において、一つの急所を為しているということができるだろう。

注

1) 本稿は 2010 年 10 月 30 日に行われた日本ラカン協会第 10 回ワークショップ「後期ラカンへのアプローチ」における発表「言語と場所――ラカンの「オイラー図」批判から出発して」を改稿したものである。
2) ソシュールは「聴覚映像（image acoustique）」を、「純粋に物理的である物質的音声ではなくて、そうした音声の心的刻印であり、われわれの感覚によって証拠立てられるそれの表象である」と規定する（ソシュール『一般言語学講義』（岩波書店、1972 年）p. 96［98］）。この規定にはそれが句切られているかどうかは明示されていないが、挙げられる例が語の例であることから、ここでソシュールが考えているのがすでに意義を参照することで句切りを入れられた「音声の心的刻印」であることがわかる。なお、以下翻訳については出典を掲げた既訳を参照しているが、訳語の統一などの必要から、原文に照らして修正を加えている場合があることをお断りしておく。
3) 「［……］周知のように音連鎖は、その第一の性質として線的である［……］。それだけとしてみれば、それは一本の線、一本のつなぎ目のないリボンに過ぎず、耳はそこになんら充分な・明確な区分を知覚しない。そのためには意義（シニフィカシオン）に訴えねばならない」（ソシュール『一般言語学講義』（岩波書店、1972 年）p. 146［145］）。
4) さらにもう一つ加えるとすれば、最適性があげられるだろう。つまりもっとも多くの有意味な単位を切り出すことのできる句切りが、正しい句切りとみなされるということである。
5) バンヴェニストはこれを、「統合能力（capacité d’intégration）」という言い方で論じている。「記号に組織された言語にあっては、ある単位の意味とは、それが一つの意味を持ち、それが有意的であるという事実に他ならない。これはすなわち、単位を「命題関数」を満たす能力によって同定するというのに等価である。これが、その単位を有意的と認めるための、必要かつ十分な条件である。より条件の厳しい分析にあっては、この単位の満たしうる「関数」を数え上げねばなるまいし、極限においては、そのすべてを挙げねばなるまい。［……］いずれにしても、それは統合能力による同定という同一の原理に従うものである。〔その原理によるならば、〕どんな場合にも、言語のある線分が「意味をもつ」か「もたない」かは

言うことができるということになろう」（バンヴェニスト「言語分析のレベル」（1964）『一般言語学の諸問題』（みすず書房、1983 年）p. 138）。

6）ラカンがこの構想をバンヴェニストから伝えられたと報告しているのは 1954 年のことである（Cf.『フロイトの技法論（下）』（岩波書店、1991 年）p. 137）。

7）ここでの「シニフィアン連鎖」をめぐる議論の詳細については、以下の拙稿を参照されたい。cf. 原和之「ラカンのクロノ＝トポ＝ロジー」『〈前衛〉とは何か？〈後衛〉とは何か？文学史の虚構と近代性の疑問』（平凡社、2010 年）pp. 325–350.

8）Cf. Kazuyuki HARA, « ‘Machine de Lacan（Lacan machine）’ ou l’audition du signifiant », in Kazuyuki HARA, *Amour et savoir : Etudes lacaniennes*, Tokyo, Collection UTCP, 2011, p. 81.

9）ハイデガー『道標 ハイデガー全集第 9 巻』（創文社、1985 年）p. 313［396］.

10）ハイデガー『ロゴス・モイラ・アレーテイア ハイデッガー選集 33』（理想社、1983 年）pp. 9–13.

11）Georges Th. Guilbaud, « Pilotes, stratèges et joueurs: Vers une théorie de la conduite humaine », conférence faite à un colloque organisé à la Sorbonne par la Maison des Sciences, Paris, le 24 mars 1953, publiée dans *Structure et évolution des techniques*, n° spécial de *Cybernétique*, 5e année, n° 35–36, juillet 1953 – janvier 1954, Paris.［Réédité et mis à jour dans la *Revue internationale de systémique*, vol. 2, n° 3, 1988, pp. 321–344. 以下出典表示はこの再版による。］論文の冒頭に付されたロベール・ヴァレによる序では、この論文がほぼ講演原稿のままであり、ごく僅かの修正といくつかの註をつけたにとどまることが述べられている。

12）*Ibid*., p. 333.

13）*Loc.cit*.

14）*Ibid*., p. 343.

15）Edouard Lucas, *Récréations mathématiques, II*, Librairie scientifique et technique Albert Blanchard, Nouveau tirage, 1979, p. 28. 初版は 1883 年。

16）*Ibid*., p. 334.

17）*Ibid*., p. 328.

18）*Ibid*., p. 342.

19）J. L. ボルヘス『伝奇集』（岩波文庫、1993 年）p. 103. なお「バベルの図書館」の最初期の仏訳としては、1944 年 10 月にロジェ・カイヨワがブエノスアイレスで出していた雑誌『フランス文芸（*Lettres françaises*）』で発表されたものが知られている（cf. Juan Moreno Blanco, « Borges depuis la France », in *Revue Silène*. Centre de recherches en littérature et poétique comparées de Paris Ouest-Nanterre-La Défense, publié le 7 juin 2016, p. 5. http://www.revue-silene.com/images/30/extrait_182.pdf（最終参照日 2018 年 10 月 21 日））。

20）*Ibid.*, p. 108.

21）ただしこのことは、「バベルの図書館」が「無限（ilimitada）」であることを妨げない。「世界は有限である（limitado）と判断する者たちは、遠く離れた場所では、回廊や、階段や、六角形などが思いがけず消えている――これは不合理なことだ――と仮定する。世界には限度がない（sin límites）と想像する者たちは、本の可能な数はかぎられていることを忘れる。古くからのこの問題について、わたしはあえて以下の解答を提出したい。図書館は無限であり周期的（ilimitada y periódica）である。どの方向でもよい、永遠の旅人がそこを横切ったとすると、彼は数世紀後に、おなじ書物がおなじ無秩序さで繰り返し現れることを確認するだろう［……］」（pp. 115–116）。ボルヘスはここで図書館の球面状の構成を考えていると言える。球面はその広がりにおいて有限ではあるが、どこまで辿っていっても限界に行き着くことはない。後に述べるような、安易に外部を考えさせない仕組みが、ここに

も認められる。

22） *Ibid.*, p. 109.

23） *Loc.cit.*

24） *Ibid.*, p. 110.

25） 拙論「フロイト＝ラカンにおける「不安」: 構造論的アプローチとその射程」、『I.R.S.――ジャック・ラカン研究』、第 12 号、2014 年 12 月、pp. 72–73 を参照されたい。

26） 上記の註 21 を参照。

27） 主体が言語＝図書館から最大の距離を取ることができるのは、彼が死んで、部屋の中央に開いている無限の深さの穴に投げ込まれ、果てしなく落下し続ける、というかたちにおいてでしかない（「わたしは、自分が生まれた六角形から数リーグ離れたところで、死に支度をととのえつつある。死ねば、手すりからわたしを投げてくれる慈悲深い手にはこと欠かないだろう。わたしの墓は測りがたい空間であるにちがいない。わたしの遺体はどこまでも沈んでゆき、無限の落下によって生じた風のなかで朽ち、消えてしまう」（*ibid*., p. 104））。しかし後で見るように、シニフィアン連鎖の概念はその手前に、もう一つ可能なポジションを設定することを可能にしている。

28） 原和之、「精神分析」を待ちながら――ジャック・ラカンにおける欲望の「公準」、『思想』、第 1034 号、岩波書店、2010 年 6 月、pp. 101–121.

29） これらはそれぞれ、その不調が「一つのシニフィアンの聴き取り」の水準にあるのか、「可能なシニフィアンの集合の投射」の水準にあるのかに対応して現れてくる二つの様態であると言える。

30） この要求の水準――いわゆる「グラフ」の上層の水準――におけるコードは、「原始的要求（la demande primitive）」ならぬ「主体がこの要求との間に取り結ぶ或る関係（un certain rapport du sujet à cette demande）」によって与えられるのであり、それこそが、「無意識的分節化」の「口唇的」「肛門的」「男根的」形態と呼ばれているものなのだ、とラカンは述べている（Lacan, *Le Séminaire, Livre VI, Le désir et son interprétation*, Paris, Editions du Seuil, 2013, p. 48. 以下「S.VI」）。

31） *Ibid.*, p. 151. ジョーンズの定式化は「女性のセクシュアリティの早期の発達」に見られる。なおこの「あれかこれか」が、保持するべき対象ではなく、諦めるべき対象の選択として定式化されていることはよく考える必要があるだろう。「かくしてわれわれは、男児と女児に一様な仕方で適用される一般化を手に入れた。不可避な剥奪の結果としてのアファニシスに直面した彼らは、自分の性器か近親相姦かのいずれかを諦めなくてはならないのだ。神経症という代償を払うのでなければ保持することができないものとは、異性愛的で他者愛的な近親相姦、すなわち近親相姦的な対象関係である」（Ernest Jones, “The Early Development of Female Sexuality”（1927）, in *Papers on Psycho-analysis*, 5th ed., London, Maresfield Reprints, 1948/1977, p. 445）。

32） 1959 年 6 月 10 日のセミネール。なお年代的に先行して存在したタイプ版、ALI 版等では「V」が言及されているのに対して、スイユ版の該当箇所では「チルダ（〜）」が言及されていることになっている（S.VI, *op.cit*., p. 509）。修正の根拠は不明である。

33） ミレール版が未刊行のこのセミネールからの引用は、「S.IX」のあとに西暦の下二桁、月、日からなる六桁の数字を付して示した。なお、私家版として出版されているミシェル・ルーサンによる独自校訂版（Jacques Lacan, *L’identification, dit « Séminaire IX » : Séminaire prononcé à Sainte-Anne en 1961–62*, Paris, 2003, 387 p.）からは多くの示唆を得た。

34） Leonhardt Euler, *Lettres à une princesse d’Allemagne*, vol. 1, Zurich, Orell Füssli, 1960, pp. 230–249（Lettre CII–CV）. ラカンはこの図の導入が 1741 年と言っているが、この書簡自体 1760 年か

ら 1762 年にかけて書かれたものであるため間違いと考えてよいだろう（cf. S.IX, 620411）。なおラカンは「オイラーの円（cercles d'Euler）」という言い方をするが、この言い方ではオイラーの別の数学的業績（いわゆる「九点円」）が指示される場合があることから、ここでは「オイラー図」と言い方で統一する。また、こうした構想を最初に導入したのは、長らくオイラーだと言われてきたが、現在では類似の構想が彼に先立って Christian Weise（1702 年 /1712 年に死後出版）によって示されていたことが知られていることを指摘しておく。

35） *Ibid.*, p. 234.

36） S.IX, 620411. なお後者はトーラス上に二つの円が描かれることで実現する。

37） *Ibid.* 内と外が問題になるような円をあくまで面との関係においてのみ考えるこうした考え方は、のちにボロメオの結び目をめぐる議論の中で「平面化（mise à plat）」の問題として展開されるだろう。結び目を構成する輪が平面との関わりで位置づけられるときに初めて、それが囲み、あるいは排除する領域の問題が生じる。

38） *Ibid.* セミネール『サントーム』では、トーラス上にある仕方で描かれた二つの輪に対して、トーラスの穴が三つ目の輪と同じ機能を果たす例が言及されている（Cf. Lacan, *Le Séminaire, Livre XXIII, Le sinthome*, Paris, Editions du Seuil, 2005, p. 82）。

39） 要求との「対峙」は、この時期のラカンが分析の鍵となる出来事として繰り返し言及している。「対峙（confrontation）」とは、ラカンによれば、「主体に自らの要求の構造を感じ取らせるような解釈とは、問題となる要求の口唇期的、肛門期的等の性格を認めさせるだけにとどまらない」。「われわれ〔分析家〕は主体を、彼の要求そのものの構造に直面させなくてはならない」。「われわれが行うのは結局のところ、D〔要求〕に対応するもののうちで、主体に対して答えを与えないようにしながら、語ること、自らを主体として認めることを学ばせること以外の何ものでもない。[/] これに対して主体に自らの要求に対峙させることなくそうした無意識の語彙〔だけ〕を教えることは、主体の機能そのものの虚脱状態を生じせしめることに帰着する。すなわち主体の消去、消滅を促すことに帰着するのであって、これこそがまさに、無意識の分析がある語彙の習得にすぎないものとなっているような技法において起きていることである。消滅するもの、逃げ去ってしまっているもの、次第に減少しているものとは、主体がもつ――そうした全てを越えて――その存在（son être）において顕現せんとする要請（l'exigence）である。主体に絶えず要求の水準へと立ち戻らせるとすれば――これがある種の技法において「抵抗の分析」といわれているものなのだが――結局その主体の欲望であるようなものの、まさに純然たる縮減を招くことになってしまうのである」（S.VI, *op.cit.*, pp. 147–148）。

40） Cf. 原和之、「ラカン、ジャック＝マリ・エミール」、加賀野井秀一・伊藤泰雄・本郷均・加國尚志監修、『メルロ＝ポンティ哲学者事典 別巻：現代の哲学・年表・総索引』、白水社、2017 年、p. 110–115.

41） Cf. ラカン『無意識の形成物（下）』（岩波書店、2006 年）pp. 368–369.

42） なお、ここで導入されている「要求」の二重性が、セミネール『父の名』以降でラカンが使うようになる、「la demande *de* l'autre」と「la demande *à* l'autre」の使い分けに繋がるものと思われる（cf. Lacan, *Des-noms-du-père*, Paris, Editions du Seuil, 2005, pp. 78–79, また S.XIII, 660427）。

43） ここでラカンはパースのカドランの彼独自の解釈を参照している（cf. S.IX, 620117、また「空白」については S.IX, 620314 を参照）。

44） フロイトはこの夢に、1911 年に追加された『夢解釈』の註のなかで言及し、また同年の「精神現象の二原則に関する定式」の中でもこれを取り上げた。

45） 『フロイト著作集 6』（人文書院、1970 年）p. 41.

46） S.VI, *op.cit*., p. 142.

47） ラカンによれば、欲望の消滅がこうした意味で考えられる限り、それはジョーンズが考えているような恐れや不安の対象とはなりえない。そもそも抑圧の不安といったものは考えられないからだ。「欲望が消滅するところに、つまり抑圧のなかに、主体は完全に包含され、この消滅と切り離されないものになっています。そして私たちは次のことを知っています。すなわち不安は、もしそれが生ずるとすれば、欲望の消滅についての不安では決してなく、それが隠している対象についての、欲望の真理についての、さらにこう言ってよければ、我々が〈他者〉の欲望に関して知らないでいるものについての不安なのです」（S.IX, 620328）。

48） ラカン『不安（下）』（岩波書店、2017 年）p. 175 及び p. 209f.

49） ラカン『精神分析の四基本概念』（岩波書店、2000 年）p. 284. 以下「S.XI」。

50） S.XI, *op.cit.*, p. 283.

51） 〈他者〉を欲望する者と捉えることが、主体にとっては彼を自分と同様の存在であると捉えることである限りにおいて、〈他者〉の欲望の隠された起源の問題はまず、自分の「同胞」の起源の問題（その最初の問題化がフロイトのいわゆる「幼児の性理論」が答えようとする「両親の愛を自分と争うきょうだいたちは、いったいどこから来るのか」という問いであった）であるが、これは人間の起源、最終的には生命の起源の問題（「快原理の彼岸」）という形をとることになるだろう。

52） セミネール『精神分析の四基本概念』でラカンはシニフィアン連鎖の拡張された形である所謂「グラフ」の簡略化された形を示し、その二つの水準との関わりでコギトを位置づけている（S.XI, *op.cit.*, p. 184）。後述図 9 を参照。

53） 上で引用した「疎外」のオイラー図を参照しつつ、ラカンはここで問題となる選択の特殊性について次のように述べている。「この〔選択の〕ことをわれわれにとっての問題によって具体的に説明してみましょう。すなわち主体の存在であり、〔図の〕ここの〔交わりの〕ところで意味のもとにある存在です。われわれが存在を選んだとします。するとそれ〔その意味のもとにある存在すなわちオイラー図の交わりの部分〕は消失し、われわれの手を逃れて、無意味のなかに落ちてしまいます。われわれが意味を選んだとします。すると意味は、この無意味の部分によってくり抜かれた姿においてしか存続しえません。厳密に言うと、この無意味の部分こそが主体の実現にあたって、無意識を構成する当のものなのです」（*ibid.*, pp. 282–283. なお ALI 版に基づき訳文を修正した）。

54） 註 52 で言及した図において、コギトはグラフの S（◊）の位置に置かれていた（*ibid.*）。これを理解するためには、ラカンが「われ思う（je pense）」が実際には「我疑う」であると述べていたことを考慮する必要がある（*ibid.,* pp. 45, 57 また S.XII, 650609）。じっさいデカルトの方法的・誇張的な「懐疑」には、「仮に間違っていたとしよう」という、思い―為しの、行為ないし選択の、すぐれてシニフィアン的な契機を認めることができる。

55） 対応するミレール版の参照先は S.XI, *op.cit.*, pp. 317–318.

56） ラカン『無意識の形成物（上）』（岩波書店、2005 年）p. 155.

57） S.XI, *op.cit.*, p. 184.

58） デカルトの「第二省察」（『増補版デカルト著作集 2』（白水社、2001 年）p. 41）、また「哲学原理」第 1 部第 52 節（『増補版デカルト著作集 3』（白水社、2001 年）pp. 60–61）を参照。

59） 固有の欲望というテーマは、すでにセミネール『欲望とその解釈』にみられる。ジョーンズの「アファニシス」について、ラカンが「主体は自分自身の欲望を剥奪されることを恐れる」（S.VI, *op.cit.*, p. 127）と述べていたことを想起しよう。

60） S.XI, *op.cit.*,p. 302.

61） Cf. 原和之、「サドの読者ラカン」、『ユリイカ』、第 650 号、vol. 46–12, 青土社、2014 年 9 月、pp. 177–184.
62） S.IX, 620328.
63） S.XXII, 750121.